

# ひきこもりについての実存論的解釈

木村史人

## はじめに

ひきこもりを専門とする精神科臨床医の斎藤環が「二十代後半までに問題化し、六か月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、ほかの精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの」(斎藤1998, 25; cf. 斎藤2016a, 55)と定義する「社会的ひきこもり」が、西鉄バスジャック事件、新潟少女監禁事件などのいくつかの事件を契機として、日本において社会問題として注目されたのは、1990年代である。近年でも、川崎登戸通り魔事件など、ひきこもりの人々が関係した事件が発生し、そのたびに焦点が当てられている。本論文1.で確認するように、政府の調査では、現在ひきこもっている人の総数は推定100万人以上と考えられるが、この数字がある程度正鵠を射ているとすると、およそ日本の人口のうち1%ほどの人がひきこもっていることになる<sup>(1)</sup>。また、ひきこもりは決して若者だけの問題ではなく、現在では中高年のひきこもりが注目されるようになってきている(池上2010; 藤田2019)。

なぜ人はひきこもるのか。本論文でまず問うてみたいのは、この問いである。また、当事者の手記や支援者、研究者による研究では、ひきこもりの人々が非常な苦境にあることが示されているが、このひきこもりの人々の苦しみの理由を明らかにすることも、本論文の目的のひとつである。さらに、このような苦しみから解放されるためには、何が必要であるのかということも明らかにすることを目指したい。

これまでにひきこもりについては、様々な立場から多様に論じられてきた。社会学者の関水徹平の整理によれば、ひきこもりに関する書籍は、その執筆をしている者によって、①「ひきこもり」経験者、②「ひきこもり」状態の成員を抱える家族、③行政、④支援者(精神科医、臨床心理士、教育者等)、⑤ジャーナリストや研究者等、という五つに分類できる(関水2016, 169)<sup>(2)</sup>。

このように、ひきこもりについては様々な立場から論じられてきたといえるが、しかし哲学の立場からひきこもりについての考察はまだ少ない。斎藤は「「ひきこもり」が哲学に新たな発想をもたらすことは、あまり期待していない。「ひきこもり」はむしろ哲学に必要な条件なのであって、哲学の対象そのものではありにくい」(斎藤2016a, 232)と述べている。しかし、

本論文では、なぜ人はひきこもるのかについて、哲学の立場から、とりわけ人間の存在構造を問う実存論的な立場から考察する。本論文の主題は、あくまでひきこもりの人々であるが、しかしその成果は、より広く、現代を生きる人々が感じる実存的な苦しみ、いわゆる「生きづらさ」の理由をも明らかにすると考えている。というのは、本論文で明らかにするように、ひきこもるとは、人間のみが理解できる意味・規範への不適合の状態と考えられ、ひきこもらずとも「生きづらさ」を感じている人たちもまた、意味・規範に息苦しさを感じているように思われるためである。

まず1. では、内閣府による調査や当事者の手記や支援者の考察を基に、現在日本にいるひきこもりの人々の推定数やその状態を確認する。2. では、なぜ人はひきこもるのかを考察し、ひきこもる理由として言及される「世間」とその性格について考察する。3. では、ハイデガーの『存在と時間』やその前後の時期の、「世人 (das Man)」論を考察し、「世間」と比較することで、我々が重層的な意味・規範の中を生活していることを示す。そして4. では、意味・規範を主題的に考察することによって、意味・規範の習得・形成における〈他者〉の存在の重要性を明らかにする。5. では、「空気」と「世間」、「世人」の成立する機制を考察し、ひきこもり問題の解決のためには、〈他者〉の存在が必要である理由を示す。

## 1. 「ひきこもり」とは何か

本節では、現在日本にひきこもりの人々がどれだけいるのかや、そもそもひきこもりとはどのような状態であるのかを確認したい。まず1. 1では、内閣府による調査を参照し、次いで1. 2では当事者の手記や支援者の考察をもとに、ひきこもりとはどのような状態なのかを捉える。1. 3では、ひきこもりの解決には「他者の介入」が必須であることを様々な証言から確認し、1. 4では、ひきこもりの第一人者といえる斎藤の提唱する「ひきこもりシステム」を参照する。最後の1. 5では、ひきこもりがいかなる意味で「問題」であるかを確認する。

### 1. 1 内閣府による調査結果

平成30年に実施された内閣府の調査<sup>(3)</sup>などで使用されている、厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 (H19-こころ-一般-010)」で作成された「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」では、ひきこもりは以下のように定義されている。

様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念である。

なお、ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低くないことに留意すべきである。

具体的には、平成30年に内閣府によって実施されたアンケート調査では、以下の項目に当てはめまる者が「ひきこもり状態」にあるとされた。

「ふだんのくらい外出しますか。」との問いについて、下記の1～4に当てはまる者であって、「現在の状態となってどのくらい経ちますか。」との問いについて、6か月以上と回答した者<sup>(4)</sup>

- 1 趣味の用事のときだけ外出する
- 2 近所のコンビニなどには出かける
- 3 自室からは出るが、家からは出ない
- 4 自室からほとんど出ない

この調査によって1～4に該当する、広義の「ひきこもり状態」にあるとされた者の出現率は1.45%であり、全国の推計数は61.3万人であった。2～3に該当する狭義の「ひきこもり状態」にあるとされた者は0.87%であり、全国の推計数は、36.5万人である。ただし、平成30年の調査は、「満40歳から満64歳の者」（以下、「中高年齢層」と呼称する）を対象に行われており、「満15歳から満39歳の者」（以下、「若年齢層」と呼称する）を対象に行われた平成27年の調査とあわせて考える必要がある。平成27年度の若年齢層への調査では、広義の「ひきこもり状態」にある者は、1.57%であり、全国の推計数は54.1万人であった。中高年齢層の調査と合わせると、広義の「ひきこもり状態」にある者は1.5%程度、総数としては、110万人程度存在していると推定できる。

また、平成30年の調査（中高年齢層）における広義のひきこもり群の男女比率は、「男性」が76.6%、「女性」が23.4%であり、平成27年度調査（若年齢層）では、男女比は「男性」が63.3

％、「女性」が36.7％であった。若齢層であっても中高齢層であっても、ひきこもりとなるのは、男性のほうが有意に多いといえるが、高齢層においてより男性のひきこもりが多いことがわかる。

平成30年の中高齢層への調査においては、ひきこもりの状態になってからの期間は「6ヶ月～1年」が6.4％、「1年～2年」が14.9％、「2～3年」が6.4％、「3～5年」が21.3％、「5～7年」が4.3％、「7～10年」が10.6％、「10～15年」が6.4％、「15～20年」が10.6％、「20～25年」が10.6％、「25～30年」が2.1％、「30年以上」が6.4％であった。27年度の若齢層への調査では期間は「6ヶ月～1年」が12.2％、「1年～3年」が12.2％、「3～5年」が28.6％、「5～7年」が12.2％、「7年以上」が34.7％であった。27年調査では「7年以上」が34.7％であったのに対して、30年の調査での「7～10年」以上を総計すると、46.7％となっている。まず若齢層でも中高齢層でも、ひきこもりの3～4割以上が「7年以上」であり、ひきこもりが長期化していることがわかる。さらに、中高齢層では、半分近く（46.7％）が長期化していることがわかる。

また、ひきこもりの人々の年代であるが、これは27年の調査では、「15～19歳」が10.2％、「20～24歳」が24.5％、「25～29歳」が24.5％、「30～34歳」が20.4％、「35～39歳」が20.4％であり、30年の調査では、「40～44歳」が25.5％、「45～49歳」が12.8％、「50～54歳」が14.9％、「55～59歳」が21.3％、「60～64歳」が25.5％であった（それぞれの調査のパーセンテージを半分にしたものが実際のパーセンテージであるといえる）。20％以上（つまり、実質10％以上）であるのは、「20～24歳」、「25～29歳」、「30～34歳」、「35～39歳」、「40～44歳」、「55～59歳」、「60～64歳」であるため、どれかの世代に集中しているのではなく、各世代に満遍なく存在しているといえる。

## 1.2 ひきこもりとはどのような状態なのか

まず、ひきこもりとはどのような状態なのかを確認しておきたい。一見したところ、ひきこもりとはただの「怠け」のように見える。しかし当事者の手記を読むと、そのような理解が的を射ていないことがわかる。当事者であった聞風坊の手記から、ひきこもりとなった当初の状態を、できるかぎり網羅的に紹介したい。

まず、あらゆる身体活動が硬直してしまい、今まで自由に動かすことができた両手両足、口耳鼻耳が自由にならなくなったとされる。具体的には、布団から起き上がれず、言葉が出ず、全身が重い膜に覆われているように感じられたという。さらに、腹は減るけれども食べる気はせず、尿意はあるがトイレに行く気がしないというような、気力の枯渇が起こったとされる。

さらに、昼も夜も寝ているが、寝たら悪夢にうなされ、目覚めたら昔の辛い思い出に襲われるために、寝るも起きるも苦痛であり、夢と現実が分からず「生きる屍状態」(聞2005, 27)であったという。また、生活は昼夜逆転し、光が苦手となり、音や影といった気配に敏感になり、いつも激しい耳鳴りがしていたという。それ以外にも、気晴らしにテレビゲームをしているときに、急に手足から血の気が引き、震えだすことがあったり、考えることが多すぎて、頭の中に血液が充満しているような感じがしているため、始終頭が痛く、その場にじっとしていられず、気が付けば叫んでいたと述べている。外見は、髪の毛もひげもそのまま風呂にも入らないため「生ける野生獣」、「戦国落ち武者のような様相」(聞2005, 32)であったという。

さらに聞は、以上のような身体における変調だけではなく、「心の硬直」についても語っている。不意に理由もなく恐怖や虚無感、不安に襲われるため、間断なく緊張しており、さらには体中の隙間からエネルギーが流出していくという感覚があったという。また、外界からの刺激を遮断しているために、呼びかけられたときにそれに反応することができなかったという。また、過去の記憶が思い出され、それへの弁解などの対処をしようとして失敗するということが日中何十遍も繰り返されたり、過去にしたことから自分は大悪人であると考え、自罰的となったり、周囲のすべての者に怒りが沸き上がっていたという。

以上のような聞の記述から、ひきこもりが壮絶な状態であることがわかる。斎藤によれば、このような初期の状態が落ち着いてきた後は、「みかけ上はあたかも無気力で怠けているだけのような状態」になるが、そのようなみかけの下で、「深い葛藤や強い焦燥感がひそんでいることがしばしば」あり、その証拠として、無為の日々を送っているながら精神的ゆとりがないために、彼らの多くが退屈を知らないとされる(斎藤1998, 24; 斎藤2007, 190)<sup>(5)</sup>。また、臨床心理士の磯部潮も、「彼らにも焦りが非常にあり、ひきこもっている状態に安住できているわけでは決してありません。彼らなりに苦しんでいるのです。どうしようもなく、うまくいっていないのです」(磯部2004, 22)と述べ、さらに「自分はどのようにして外界に出て行けないのか、自分は今何をしたらいいのかわからない、こうなった自分を変えていきたいがその方法は皆目わからず、それゆえに「彼らは救いを求めており、一方でその方法がわからず苦しんでいる」(磯部2004, 26)としている。

ひきこもりをただの「怠け」とする理解は、ひきこもりが本人の意思によって行われているという理解を含意しているだろうが、聞は「その人にとって、動作の選択肢が「引きこもる」しか残されていなかったから、今、引きこもっているのだと思っている。／そして、その人は、我が身の状況をなんとか改善しようと日夜努力はしているのだが、いまだ解決の道筋が

見えず時間だけが過ぎ去り、結果的に長期間引きこもっているのだと考えている」(聞2005, 4)と述べ、またソーシャルワーカー(精神保健福祉士、社会福祉士)の芹沢茂喜は、「ひきこもり」が当人の複数の選択肢から選択した行為ではなく、「学校に行く(就職する)」か「ひきこもり」かの二者択一から、ひきこもりしか選べなかった人が多いと指摘している(芹沢2018, 68)。すなわち、ひきこもっている人々の多くは、みずから望んでひきこもりを続けているわけではなく、「ひきこもり状態から抜け出したいと、誰よりも強く願いながら、それがどうしてもできない」(斎藤1998, 35)のである。

また、「社会的ひきこもり」の状態にある人は、精神医学的な意味で病気なのかという問いに対して、斎藤は、そうではないとする。確かにひきこもりの状態にある者には、自己臭症状、被害妄想、強迫症状、対人恐怖症などの症状が現れることがあるが、それはまず「ひきこもり状態」があって、この状態に続発する形で、さまざまな症状が起こってくるという意味で、二次的なものであるとされる。

### 1.3 ひきこもりはいかに解決されるのか？

ひきこもりを自分の意思によるものとする理解は、ひきこもりという状態の解決は、本人の意思や努力によってなされるという理解を帰結するだろう。しかし、斎藤は、次のように述べている。

ひきこもり状態が数年以上続いて慢性化したものは、家族による十分な保護と、専門家による治療なしでは立ち直ることができません。[...] 第一に、そのような援助なしに改善した事例の話を、これまで聞いたことがない、第二に、私の診療した事例でも、濃密な治療的關係なしに立ち直っていった事例は皆無である(斎藤1998, 111-2)。

別所でも斎藤は「ひきこもり状態は、放置してもそこから抜け出せないままになることがきわめて多い」のであり、「現時点では完全な自助努力や家族の支えのみでひきこもりから離脱し得たケースは、きわめて稀」(斎藤2016a, 31)であると述べている。斎藤は「ひきこもり状態にあっては、何とかして家庭を二者関係から三者関係へと開いていく必要がある」(斎藤2012, 55)のであり、「ひきこもりを脱するためには、どこかで必ず「第三者の介入」が必須である」(斎藤2012, 56)と述べ<sup>(6)</sup>、さらに「ひきこもりの人が現状から抜け出そうと思うなら、最初の課題は「仕事」ではありません。まず他者に出会うことからです」(斎藤2012, 72)

と述べている (cf. 斎藤1998, 117; 斎藤2016a, 227)。

同様に磯部も「「ひきこもり」の人が「ひきこもり」から脱出するとき、必ず対人関係が復活」(磯部2004, 136)すると指摘し、和歌山大学保健管理センター所長の宮西照夫もまた、ひきこもる若者を抱えた家族は、不安と焦燥感で苦悩し、そうした親の姿が、子どもの負担やプレッシャーを高めるといふ悪循環の連鎖が形成されると指摘したうえで、その連鎖を断ち切るために、「まず第三者、つまり精神保健の専門家やメンタルサポーターを、密室化した家庭に送り込み、親子間の適切な距離をとれるようにすることで「冷却期間をもてるようにする」(宮西2011, 138)ことから援助を開始すると述べている。

以上の支援者たちの発言は、ひきこもりの解決のためには「他者の介入」が必要であると考えている点で共通している。しかしながら、ひきこもりとは、このような「他人の介入」を何より嫌うために、解決が難しいといえる。

#### 1.4 ひきこもりシステム

1.3で示したように、ひきこもりは本人だけでは解決せず、他者の介入が必須であるといえる。以上を踏まえ、斎藤による「社会的ひきこもり」についてのシステム論的理解を参照したい。斎藤によれば、「社会的ひきこもり」とは、(1)個人、(2)家族、(3)社会という三つの領域がコミュニケーション不全に陥っている状態であり、「個人と家族」、「個人と社会」の間の回路が塞がれていることが問題であるとする。

たとえば、一時的に(1)個人と(3)社会とが分離し、その結果ひきこもりとなったとしても、(1)個人と(2)家族とのコミュニケーションが成立し、また、(2)家族と(3)社会とのコミュニケーションも成立していることにより、長期的には解決可能であるという。しかしながら、斎藤によれば、ほとんどのひきこもりの事例においては、(1)個人と(3)社会の間だけではなく、(1)個人、(2)家族の間にも悪循環があるため、事態はいつそうこじれるという。こじればこじれるほど安定するこの悪循環が「ひきこもりシステム」と名づけられる。さらに斎藤が指摘するのは、多くの事例において、「家族システム」と「社会システム」が乖離し、家族だけが個人を「抱え込もう」とすることである。

こうした抱え込みにおいて、「家族システム」と「社会システム」は乖離してしまいます。乖離するのみならず、しばしばそこには、家族内で起こっていた悪循環と同様のものが生じてきます。つまり、「世間」からのプレッシャーに対して、家族がいつそう孤立し、ま

さに「世間体」ゆえに、治療や相談に接する機会も失われてしまうということです。これがいっそう、こうした「抱え込み」を強化するのです。その意味では、家族もまた、社会からひきこもった状態にあるといっても過言ではありません（斎藤1998, 107; cf. 斎藤2007, 196-8; 斎藤2016a, 86以下）。

以上の理解から、斎藤は、ひきこもりを解決していく第一段階として、隣り合った二つのシステム同士の接点を回復することをあげる。すなわち、無理に「個人システム」を「社会システム」に結びつけようとするのではなく、本人と家族、家族と社会という二つの接点を回復することからはじめることを提案する（cf. 斎藤1998, 133）

### 1.5 ひきこもりは「問題」であるのか

本節では、まずひきこもりの定義、概観を確認し、そのうえでひきこもりが解決するためには「他者の介入」、斎藤の考察によれば、三つのシステムの接点の回復が必要であることを確認した。しかし、そもそもひきこもりとは解決されるべき「問題」であるのだろうか。

社会学者の関水は、「問題」を「あるべき状態から外れた状態」、つまり望ましい状態あるいはあるべき状態から外れているがゆえに「非難」「同情」「心配」の対象となるものと定義し、「本人にとって「ひきこもり」経験が解決されるべき「問題」にとどまらない意味を持つのに対して、周囲の人びとにとって——他人の経験としての、もしくは自分自身の経験としての——「ひきこもり」経験は、多くの場合もっぱら解決されるべき「問題」と意味づけられている」（関水2016, 15）とする。

さらに当事者であった上山は、以下のように問いかける。

——ひきこもりというのは、何よりもまず〈問い〉なんです。「仕事をしなければならぬ」とか「学校へ行かなければならぬ」というのは、非常に安易に提出された〈答え〉です。そういう〈答え〉を無条件に突きつけるのではなく、どうか〈問い〉を共有してください。ひきこもりは、誰よりもまず本人にとって〈問い〉なんです。ご家族も、その〈問い〉を共有してあげてください。「なんでなんだろうね」って。（上山2001, 107）

すべてのひきこもりを一律に解決されるべき「問題」とみなすことが、本人にとっての「意味」を遮蔽し、〈問い〉の共有を拒絶することにつながるとすれば、それは慎まなければなら

ないだろう。

芹沢は、「ひきこもり」はそれ自体では、「私（達）が考えていること」と「相手が考えていること」との間のズレとしての問題ではなく、「ひきこもるという行動が家族や周りとは折り合えなくなっていることが問題である」（芹沢2018, 6）と述べている。すなわち、ひきこもりは「家族や周りとは折り合えなくなっている」ときに「問題」となるのであり、仮に内閣府の調査においてひきこもりの基準を満たしていたとしても、その行動が本人と周囲の納得のもとでなされているのであれば、それを解決する必要性は少ないだろう<sup>(7)</sup>。しかしながら、ひきこもり当事者たちやその周囲の人々にとって、ひきこもり状態が「問題」として認識され、苦しみの原因となっているならば、それを「問題」ではなくすべき、すなわち解決・解消されるべきであるといえるだろう（以下本論文では、以上のようなひきこもりが解決されるべき「問題」となっている事象を「ひきこもり問題」と呼称する）。

## 2. ひきこもり問題と世間

前節では、ひきこもりとはどのような状態であるのかが確認され、解決するためには「他者の介入」が必須であり、さらにはそれが「問題」であるかどうかを検討された。本節では、なぜ人はひきこもるのかを考察したい。2.1では、まず主に支援者の考察を参照しつつ、ひきこもる理由について仮説を提起する。2.2では、ひきこもる理由として言及される「世間」について阿部謹也や鴻上尚史の考察を参照する。以上の考察を踏まえて、2.3では、山本七平の「空気」についての分析、特に彼の臨在感的把握について考察する。最後に2.4ではひきこもりと世間との関係を考察する。

### 2.1 なぜ人はひきこもるのか

1.1で確認したように、社会的ひきこもりの事例は、圧倒的に男性に多い<sup>(8)</sup>。その理由として、斎藤は、「現代日本の社会状況において、一般に男性に対する期待度が女性に比べて高いこと」、つまり男性の場合、「青年期までに就業、就学などなんらかの社会活動に関わっていなければ社会的に非難されやすい」ことを挙げている。男性に対して女性は「いわゆる「家事手伝い」といった形で、かならずしも社会参加をせずに、自宅での生活を続けることが部分的には可能で」あり、また「結婚後は家庭の主婦としての役割が、一般には期待されがちで」（斎藤1998, 208）あるとされる。このような、性別による社会的役割分担は、近年急速に変化

しているものの、いまだに残っているものであり、それゆえ女性のほうが男性よりも、ひきこもり状態が社会的に問題視されにくく、周囲からの圧力も少ないとされる (cf. 斎藤1998, 208; 勝山2001, 175)。

また、磯部はひきこもりの人々が自分の状態に困惑し、苦しんでいるのは、「当然、社会の一員であることが期待される年齢でありながら、彼らは社会参加できない」ことで、「自分でもどうしようもないという焦りにとらわれて、絶望感、罪悪感を抱き、空虚な感覚に支配される」(磯部2004, 81) からであるとするが、ひきこもりの年齢として、20代から30代の男性が多いのは、この年代が「当然のこととして、社会の中心的担い手であることが期待されて」(磯部2004, 100) いるために、「ひきこもり」が長期化したときに、周囲の無言の圧力を感じて苦しむのは、男性のほうが多いのではないかとしている。

さらに宮西は、社会的ひきこもりとは、「高学歴が人生での成功や幸せ、つまり、経済的成功(お金持ち)を約束するとの強固な価値観、妄想的ともいえる確信」(宮西2011, 65) により若者が拘束され身動きが取れなくなった状態であり、「ある社会、少なくともある集団が構築した妄想体系により創造された若者の病理現象」であるとする。そのうえで宮西は「男性の社会的プレッシャー」として「女性は就職しないでも結婚という最終就職があるとか、男性は就職して家や家族を支えることが当然の義務である」(宮西2011, 89) という男尊女卑の考え方から日本社会がいまだに脱却できていないと指摘している。また、男女ともに「男らしくあること、女らしくあること」への抵抗や失敗、つまり「性同一性」の形成障害がひきこもる若者に共通してみられるとする(宮西2011, 89)<sup>(9)</sup>。

以上の言葉から判明するのは、ひきこもり当事者の人々は、「働かなければならない」「優等生でなければならない」などの「～なければならぬ」などの規範に囚われ、それに苦しめられていることである。このことは以下の当事者である聞の文章の内にも読み取ることができる。彼は、ひきこもっている最中、

・この年になって、働いてなくちゃ、友達はいなくちゃ、恋人いなくちゃ、親に養ってもらってちゃ恥ずかしい／・誰もわかってくれない。自分は独りだ。／・他人は自分を痛めつける。／・どうせなにをやってもダメ人間だし。(聞2005, 105)

というような「～しなくちゃ」「～いなくちゃ」という規範による自分へのダメ出しを繰り返したとする。さらに聞の記述で興味深いのは、彼の家族も同様の価値観を自明なものとし、そ

れを聞に押し付けていたことである。すなわち、家族は「・ひきこもりは治さなくちゃ、治してもらわなくちゃ。／・弱いから、自身がないから引きこもる。強くさせなくちゃ。／・ただの怠けだ。生きる努力が足りないだけだ。甘やかしちゃいけない。」(関2005, 104) という規範を持っており、それによって聞を抑圧していたとされる。

また、当事者である勝山の父親は、勝山に「普通に生きることをさかんに勧め」るような「普通至上主義者」(勝山2001, 48) であり、また関水のインタビューのAさんは、「「普通」を外れると大変」だと語り、「ひきこもっている間は、働いていないイコール人間ではない、というような感覚はありました」(関水2016, 44) と語り、また同様に関水のインタビューのCさんは「期待される生き方から外れてしまった自分、「できなかった」自分を受け入れることは容易ではなかった」(関水2016, 53) と述べている。さらに関水が

「ひきこもり」経験者たちは、「不適応な自分」に対する両義的な態度に根差した〈問い〉の二重性を受け止めるまでに、多くの時間を費やしてきた。周囲の人びとに受け入れられた〈問い〉——裏側に答えの貼りついている〈問い〉——のみに駆り立てられ、期待される生き方ができない自分を責め、否定するところに「ひきこもり」経験者の苦しみはある。(関水2016, 66)

と述べるように、社会で通用している「普通」に適合できないこと、期待されている生き方ができないことによって自分を責め、否定することが、ひきこもりの人々の苦しみであるといえる (cf. ほそつと池井多2020, 21, 54, 74, 83)。しかしながら、「普通」とは誰にとっての「普通」であり、「周囲の人びと」とは誰で、期待しているのは誰であるのだろうか。すなわち、「普通」という規範を制定し、そこからの逸脱を監視しているのは、誰であるのだろうか。

## 2.2 世間とは何か

ほそつと池井多が『世界のひきこもり』のなかで、フランス、アメリカ、パナマ共和国、カメルーン、インド、バングラデシュ、フィリピンのひきこもりたちへインタビューを行っているように、ひきこもりは決して日本独特の現象ではないものの<sup>(10)</sup>、やはり日本においてその数が諸外国に比べて圧倒的に多いというのは事実である(磯部2004, 104)。それゆえ、これまでにも日本の社会の性格との関係で論じられることがあった(斎藤2016a, 109ff.; 河合・内田27ff.)。そしてその際、しばしば日本の共同体の性格として指摘されたのが、日本の「世間」

である。

斎藤は「わが国では、急速に成熟社会化が進む一方で、驚くほど旧態依然とした世俗的価値観、「世間」の視線といったものが、まだまだ残って」おり、それらは不登校やひきこもりを自明のごとく問題視するだけではなく、当事者たちはこうした「世俗的価値を内面化し、それゆえにひきこもる自分を自己批判し続けることになる」（斎藤2016a, 21）と述べている。あるいは勝山との対談のなかで、ひきこもるきっかけは百人百様であるのに対して、一旦ひきこもってしまうと、パターンの似通ってくる指摘し、抜け出そうとして焦れば焦るほどはまり込んでしまうという「悪循環を促進しているのは、まさに世間の目や社会システムや親のプレッシャー」（勝山2001, 176）であるとする<sup>(11)</sup>。「ひきこもり」の人々およびその家族を苦しめているもののひとつが、このような「世間」であり、そこで通用している規範であるのは、間違いがないであろう。

また、当事者の証言のなかでも、しばしば「世間」について言及されることがある。たとえば、勝山は「世間体を気にして人の目を気にして、／嫌われないよう、仲間はずれにされないよう、／それだけを気にして生きてきた」（勝山2001, 56）と述べる（cf. 勝山2001, 82f., 174）。

田辺がインタビューした岡崎は辛くても卒業するまで高校に通い続けた理由を「自分が世間体を気にする見栄っ張りな人間だということがよくわかっていたから、高校くらい卒業しておかないと死んじゃうだろうと思ったんですね」（田辺2000, 145）と話している。さらに、田辺がインタビューした大貫は、そのインタビューの最後で「人から後ろ指をさされないため、自分で稼いで生活できるようになったらいいな、と思っています」（田辺2000, 193）と述べているが、この言葉からは「人から後ろ指をさされない」ということが未だ本人にとって重要な意味を有していることを読み取ることができる<sup>(12)</sup>。

以上のひきこもり当事者の発言からは、彼らにとって「世間」や「世間体」が、否定や反発の対象であったとしても、重要な意味を有する存在であることを読み取ることができるが、しかしそれでは、後ろ指をさす人（世間）とは誰であろうか。

「世間」について考えるために、本項では、日本人の大人であれば誰もが「世間」という言葉を用い、「世間」を知っているにもかかわらず、「世間」という日本独自の関係はこれまで研究の対象になったことがなかった。したがって私は参照すべき文献ひとつないところから始めなければならなかった」（阿部2006, 191; cf. 阿部1995, 13）と述べ、「世間」についての研究の嚆矢となった阿部謹也と、その阿部を参照しつつ、「世間」や「空気」について考察している劇作家の鴻上尚史の分析を参照したい。阿部によれば、「世間」とは「自分が関わりをもつ

人々の関係の世界と、今後関わりをもつ可能性がある人々の関係の世界」(阿部1995, 4)であり、また鴻上は「あなたと、現在または将来、関係ある人達のこと」と述べ、具体的には「学校のクラスメイトや塾で出会う友達、地域のサークルの人や親しい近所の人達」(鴻上2019, 14)であるとする。

阿部はヨーロッパでは、中世半ば以前は日本の「世間」と同様に「集団がすべての物事を中心」であったが、その後「個人を単位とする社会に進化し」(阿部2006, 116)たと述べる。「世間」の反対語は「社会」であり、「社会」とは「あなたと、現在または将来、なんの関係もない人達のこと」であり、具体的には、道ですれ違った人や、電車で隣に座っている人、初めていくコンビニのバイトの人、隣町の学校の生徒などである。「世間」の例として挙げられる、鴻上の印象的な例を引用しよう。

昔、僕が駅で電車を待っていた時のことです。／周りにおばさん達が何人かいました。／電車がホームに入ってきて、ドアが開くと、僕の前にいたおばさんが駆け込みました。／そして、四人掛けのシートの前に立って、僕の後ろに向かって声をかけました。／「鈴木さん！ 山田さん！ ここ、ここ！」／後から来たおばさん達は、その声に従って、僕を追い越して当然のようにシートに座りました。／僕ともう一人の乗客は、おばさんにブロックされて、シートに座れませんでした。／一般的なルールでは、乗ってきた順番にシートに座るはずですが、でも、このおばさんは、僕達を無視して、後ろの仲間を呼んだのです。(鴻上2019, 15; cf. 阿部2019, 18)

このおばさんについて鴻上は、決して冷たい人ではなく、おばさんを知る人達の間では、世話好きで面倒見が良い人物であり、自分と関係のある人達としての「世間」を大切にしているが、自分と関係のない「社会」の人を無視しているだけであるとする<sup>(13)</sup>。

続いて、阿部と鴻上による「世間」の性格について概括しよう。阿部は、日本の社会とは「社会と個人」という近代において形成された公共的な関係と、「世間」という伝統的な、私的な関係が常にまわりつく疑似公共性という、二つのシステムが共存するダブルスタンダードの社会であると指摘する。その「世間」の性格としてまず挙げられるのが、成員が「贈与・互酬」、たとえばお中元、お歳暮、結婚の祝い、香典返しなどによって関係していることである(阿部1995, 17; 阿部2006, 95-6, 146)。この「贈与・互酬」は、モースが『贈与論』で示したように(モース2009, 103)、ただ贈り物をすることによって、双方が結びついていること以上

のことを意味しているだろう。すなわち、「贈与」はいわばそれを贈り受けとることで「貸し」を作るのであり、「反対贈与」を義務づけるのである。

さらに阿部が指摘する重要な点は、贈与・互酬が行われる際、お互いの人格ではなく、その人の立場・地位が重視されるという点である。つまり、世間では、それぞれが立場や地位などの「場」を持つため、贈与は受け手の「場」に送られるだけとされる（阿部2001, 96; 阿部2006, 96-7; 鴻上2009, 52-5; 阿部2019, 177）。さらに、「世間」の中における場には生まれや年齢、地位、財産などによって序列があり、場の均衡によって「世間」の序列が保たれているのである（阿部2001, 146-7）。また、「日本人は一般的にいて、個人として自己の中に自分の行動について絶対的な基準や尺度をもっているわけではなく、他の人間との関係の中に基準をおいている」（阿部1995, 137）とされる。以上の二つの性格は、「贈与・互酬」は、自由意志で行われるのではなく、いわばその立場によって義務として課されることを示している。

「世間」の性格として次にあげられるのが、「共通の時間意識（共通の今）」のもとで、年上か年下かなど、その共同体に所属している時間の長さ、すなわち「長幼の序」が重視されることである（阿部1995, 17; 阿部2006, 97; 鴻上2009, 56-61）。さらに阿部は、「世間」の時間感覚について、以下のように述べている。

「世間」の中では時間は「今」しかありません。時間が問題になるとき、ほとんどの場合、今が問題になっているのであって、来年や去年はその今の中で問題になるにすぎないのです。時に「世間」の中には時間が存在していないようにすら見えることがあります。（阿部2001, 158）

すなわち、個人がそれぞれの時間を生きているのではなく、その「世間」共通の時間を生きているのであり、それゆえ同じ時間を生きていると思えない相手は、同じ「世間」のメンバーとは認められないことになる。また、このように同じ時間の中に参入しているという感覚があり、その長短によって関係が決まるため、「世間」においては「世間の掟を守っている限り、能力の如何を問わず何らかの位置は世間の中で保てる」（阿部1995, 22; cf. 鴻上2009, 62-7）とされる。

以上のような性格を有する「世間」は、西欧のように市民を主体とする公共性ではなく、それぞれの「場」をもつ者の集合体として維持されている（阿部2001, 98）。「「世間」の中で生きていた人は個性を主張する必要はなかった」（阿部2001, 168）とされるように、「世間」の意

向に反するような個性を発揮することはできないのであり、鴻上が補足するように、もし「世間」の暗黙のルールを破った時には、誰であっても差別され、弾き飛ばされるという「差別的で排他的」な性格を有している。またさらに、「世間」に生きる人たちは、「迷信」や「おまじない」や「ジンクス」や「しきたり」などを信じていて、そして、それを守ることを求められているという「神秘性」という性格、つまり非合理的な性格を持つとされる（鴻上2009, 68-78）。

### 2.3 空気と臨在感的把握

前項では、阿部と鴻上の考察を基に、「世間」の性格を概観したが、彼らはそれがいかに現に成立し、維持されるのかについては論じていない。本項では、この問いを解明するために、山本七平の『空気の研究』の考察、特に彼の「臨在感的把握」に注目したい。

阿部が「社会」と「世間」というダブルスタンダードを指摘していたように、山本は『空気の研究』において、日本人は常に、「論理的判断の基準」と「空気の判断の基準」という、二重基準のもとに生きていくとする。「空気」は、非常に強固でほぼ絶対的な支配力をもつ「判断の基準」であり、それに抵抗する者を異端として、「抗空気罪」で社会的に葬るほどの力をもつとされる。

山本は、「空気」が醸成されるメカニズムを明らかにしようとするが、その際、対象へと感情移入し、それを絶対化することで、感情移入をしていることが忘れられたあり方を「臨在感的把握」と呼ぶ。山本によれば、日本人的世界では、あらゆる方向に臨在感的把握をする対象があるため、人々はそれらによってあらゆる方向から支配され、金縛り状態になっているとされる。

山本は、道路に重傷者が倒れていても、人々は傍観しており、介抱するのは会社の同僚だけであったという「三菱重工爆破事件」（山本2018, 13）や、イスラエルの遺跡（古代の墓地）で人骨の発掘をした際に、ユダヤ人は平気であったにもかかわらず、日本人だけが病人同然となり、「おはらい」が必要だったという「イスラエルでの遺跡の発掘」（山本2018, 33）、ヒヨコに親切でお湯を飲ませて殺してしまう例、母親が保育器の中に懐炉を入れて、赤ん坊を殺してしまう例（山本2018, 40）を挙げ、これらの例においてなされていたのが、感情移入による臨在感的把握であるとする。

たとえば、爆破事件では、知り合いに対しては臨在感的把握をおこない、見ず知らずの人々に対してはそうしなかったことによって、彼らを容易に見捨てるということができたのである。あるいは、「イスラエルでの遺跡の発掘」で、日本人のみが病人同然となったのは、彼らだけが人骨に対して臨在感的把握をしたことによって、それを単なる物とはみなせなくなったため

といえる。また、ヒヨコにお湯を飲ませたり、母親が懐炉を入れるという例では、ヒヨコや赤ん坊に対して臨在感的把握することによって、その意向を（誤った仕方でも）思念したといえるだろう。これらの例から、臨在感的把握とは、或るものを「ただの物」ではないものとする作用であるといえるだろう。

以上の臨在感的把握を用いて、2.2で鴻上が「世間」の例としてあげた電車の中の状況を考察するならば、「おばさん」は、知り合いに対してのみ臨在感的把握を行っていたといえる。「自分が関わりをもつ人々の関係の世界と、今後関わりをもつ可能性がある人々の関係の世界」としての「世間」とは、臨在感的把握がなされる範囲ということができる。もし仮に、この状況で「おばさん」が他の乗客にも臨在感的把握を行っていたならば、「世間」はその車両の乗客まで広がっていたのであり、そのつど臨在感的把握を行う射程によって「世間」は伸縮するのである。

本項では、山本の臨在感的把握を参照することで、「世間」や「空気」の生成の過程について考察した。しかし本項の考察は、次の点で不十分なものであり、暫定的なものである。第一に、本項では、山本が「空気」発生原理として提示した臨在感的把握によって「世間」の成立を説明したが、「空気」と「世間」との関係については、まだ論じていない（本論文5.で考察する）。第二に、山本の臨在感的把握だけでは、「空気」や「世間」が有する規範性を説明できない。というのは、臨在感的把握によって、ヒヨコの中に（誤った）「意向」を見出すことで、ヒヨコにお湯を飲ませる心性は説明できるだろうが、しかしヒヨコのためにお湯を飲ませることは、非合理の行為であっても、「空気を読んだ／読まない」行為であるかという点、そうではないと思われるためである。すなわち、「空気」とは「読むべきもの」として他者と共有される規範性を有するといえるが、臨在感的把握だけでは、このことが説明しきれないのである。

## 2.4 世間とひきこもり

2.2で述べたように、「世間」とは独特の規範を有し、それによってその規範に従わない者やそれに合わせることでできない成員を抑圧する性格を持っているといえ、ひきこもりとはそのような「世間」の規範に適合することができないこと、あるいはそこに適合しようとしすぎ、それによって疲弊したために引き起こされるといえる。この状態が解決されるためには、そのような「世間」の規範との不適合が解消される必要がある。

関水は「ひきこもり」経験を「自分と社会とを引き受け直す模索のプロセス、引き受けよう

と思える自分と社会とを模索するプロセス」(関水2016, 10)であると述べ、それゆえ「ひきこもっているという行為はけっして——これまでしばしばそのように解釈されてきたように——たんなる「身動きのできない状態」ではな」(関水2016, 67)く、「他者による自己理解と自己自身による自己理解が同時進行的に進むことで、規範に適応できない自分を少しずつ受け入れることができるようにな」(関水2016, 43)る動的なプロセスであるとする。

別言すれば、「ひきこもり」体験とは、〈他者の問い〉を〈自分の問い〉としてとらえ直すことであり、ひきこもりの意味を「自分なりに定義しなおすこと」(関水2016, 100)であるといえる。しかしひきこもりとは、与えられた〈他者の問い〉によって自分を責め続け、そのことで疲弊してしまうため、「自分の問い」に自覚的に取り組むことが、極めて困難な状況でもある(関水2016, 68)<sup>(14)</sup>。そこで、重要となるのが、1. で確認されたような「他者の介入」である。関水のインタビューーのCさんが「できない」自分を受け入れるために必要なのは、「否定したりアドバイスしたりするのではなく、ただ自分の話を聞いてくれる人の存在」(関水2016, 54)であり、「ひきこもって、自分もそうだけど、地元で友達がいなかったり、知り合いも全くいなかったり、話せる相手がいなかったりとなると、自問自答になって、よけいおかしくなって、何でわかってくれないんだ、となる」(関水2016, 55)と述べるように、上述のプロセスは「独り」では駆動しないのである。すなわち、関水が「ひとりで自問自答を繰り返すのではなく、自分の「いわんとすることが伝わる」関係のなかで、自分の言葉を受け止めてもらえることによって進んでいく。自分の話を聞いてくれる人との関係のなかでこそ自己理解は進む」(関水2016, 55)と述べているように、他者とのかかわりが重要な契機となる。

本項において紹介した関水の洞察を、2.2の「世間」についての暫定的な考察を用いて捉え直したい。関水のいう〈他者の問い〉とは、「世間」から期待されるあり方であり、ひきこもりとは、そのような〈他者の問い〉に応答できず、「世間」の規範や意味に適合できずに苦しんでいる状態であるといえる。たとえば〈他者の問い〉とは「なぜ働かないのか」という問いであり、その問いの裏面には、「働くべきだ」という「世間」の規範が貼りついている。そのような〈他者の問い〉を〈自分の問い〉として捉え直すこととは、たとえば「なぜそもそも働かなくてはいけないのか」「私が働く必要はあるのか」という問い、すなわち「世間」において自明とされている規範や意味を問い直し、そのうえで自分のあり方を捉え直すことといえるだろう。

### 3. 世人と世間

2. では、「世間」がひきこもりと関係していることと、その成立を山本の臨在感的把握という概念を参照しつつ暫定的に考察した。本節では、『存在と時間』やその前後の時期の、「世人(das Man)」論を考察したい。細谷貞雄はdas Manを「世間」と翻訳しており、ハイデガーの「世人」が日本における「世間」と近いことは以前より指摘されていたといえる(森2020, 93)。しかしながら、本節で確認するように、両者は重なる点もあるが、根本的に相違した概念であると捉えるべきである。阿部が指摘していたのは、日本人は「社会」だけではなく、「世間」のうちにも生きているということであり、山本が指摘していたのは、「論理的判断の基準」だけではなく「空想的判断の基準」の内でも生きていることであった。ハイデガーの「世人」論を参照することで、我々が理解する意味・規範には多層性が存在すること、すなわち現代の日本人は「世間」のうちで「世人」として生きていることを明らかにすることができるだろう。

3. 1では、『存在と時間』やその前後の時期に展開された「世人」についての考察を概括し、3. 2では「世間」と「世人」とを比較する。続いて、3. 3では『存在と時間』において非本来性から本来性への実存の変容の契機となる「不安」と相似した気分を、ひきこもりの人々も感じていることを指摘する。以上の議論を踏まえて、3. 4では、『存在と時間』における「先駆的決意性」がひきこもり問題を解決するための処方箋となりうるのかを検討する。本節の考察は、『存在と時間』の思想の実効性を、ひきこもり問題を試金石とすることで検証する試みといえるが、3. 5では、『存在と時間』の思索にある種の不十分性があることが明らかになるだろう。

#### 3. 1 ハイデガーの世人論

『存在と時間』において、ハイデガーは、「差しあたって、自分に固有な自己という意味での「私」が「存在している」のではなく、世人というあり方をしている他者たちが存在している」(SZ, 129)と述べ、日常性において我々自身の自己も他者の自己も、懸隔性、平均性、均等化という「公共性」の特徴を備えた「誰でもない者」(SZ, 128)である世人として存在しているとす。さらに、『時間概念の歴史への序説』(1925年)における「世人自己は世人のなすことである。日常的な現存在の解釈は、そのつど配慮されているものから、解釈や命名の地平を手に入れる。世人は靴屋、仕立て屋、教師、銀行家である」(GA20, 336)という指摘を踏まえるならば、我々の「誰」(たとえば、「大工」)の理解は、我々が世人としてなすこと(たとえば、

「叩くこと」や、世人として配慮するもの（たとえば、「叩くためにあるものとしてのトンカチ」）から理解されるのである。

我々が「仕事中」の彼らに出会うとは、道具の意味のネットワークとしての場所において他者や自身を理解するということである。たとえば、大工がトンカチで釘を木材に打ち付ける際には、トンカチと釘と木材だけではなく、それらが存在している仕事場の全体が適切に配置されていなければならないし、さらにはトンカチや釘、木材の生産者や完成した家に住む者との関係が成立していなければならない。このような道具のネットワークの中で自他を「世人」（たとえば、大工）として理解しているからこそ、我々はその状況のなかでどのように行為すべきなのか／べきでないのかを理解できるといえる。たとえば、同じ仕事場を見ても、熟練の大工は、素人では気づかない不備に気づくことができるなど、見え方が異なるだろう。それは、大工が自らを「大工」として了解し、そこを起点として様々な道具を意義付けているためである。さらに、大工の仕事場では、通常、大工の仕事こそが「すべきこと」であり、音楽を演奏することは「すべきではないこと」とされるだろう。

さらに『存在と時間』における「今」とは、第一に、道具を配慮することを可能にする、保持・忘却と予期との連動において機能するものとしての現在化とされる。

配慮は、「その時」においては予期しつつ、「あの時」においては保持しつつ、「今」においては現在化しつつ、おのれを言表している。「その時」のうちには、多くの場合には表立たずに、「今はまだない」ということがある、[…]「あの時」は、「今はもはやない」ということをそれ自身のうちに蔵している。[…]「その時」と「あの時」とは、「今」という観点においてともに了解されているのである。言いかえれば、現在化することが特有の重みをもっているのである（SZ, 406-7）。

配慮する際に理解されているこのような「今」は、「最終的には、現存在の存在しうることのためという目的のうちに固着させられている」ことによって、何々するに適切である、あるいは不適切であるという有意義性と同様の性格を有することから、「世界時間」と名づけられる（SZ, 414）。世界時間とは、「日付け可能なものであり、伸張のあるものであり、公共的なものであり、そしてこのように構造づけられたものとして世界自身に属している」（SZ, 414）ような時間である。すなわち我々が道具を使用する際に気に掛ける「…する今」とは、均質ではなく伸び縮みするものであり、さらに他者とも共有されているものである。

### 3.2 「世間」のなかで「世人」として生きている

3.1で概括された世人のあり方は、一見したところ、世間で生きる人々のあり方と相似しているようにも思える。第一に、「世人」のあり方において、物を介して、大工がトンカチで釘を木材に打ち付ける際には、道具や素材との連関だけではなく、素材の生産者や消費者との関係もまた、有意義性の一部をなしていたように、「世人」とは様々な物や人との関係のなかで生きている点が、「世間」が関係のある人々の集まりであるという点と相似しているといえるだろう。さらに、世人の「誰」はそのような関係のなかで規定されるのに対して、「世間」においては、個人が見られるのではなく、「世間」の中の「場」として贈与などがなされるとされていた。さらには、「世間」には贈与されたときにその返礼をしなければならないといった規範性があったが、「世人」もまた、なにをすべき／するべきではないという規範性に拘束されていた。最後に、「世間」においてはその成員が共通の時間意識を持つとされたが、「世人」もまた「世界時間」を共有しているとされた。

上述のように、一見したところ、「世人」と「世間」とはいくつかの性格を共有しているように思われるが、両者は根本的な点で相違しているといわざるをえない。それは、「世人」の「誰」があくまで世界における道具との関わりから規定されるのに対して、「世間」ではそれ以外の要因、たとえばその「場」に属している時間の長さ（「長幼の序」）が重視されるためである。たとえば、「大工の先輩」を例として考えてみよう。世人としての「大工」は、その世界の物との関わりから、すなわち家を作ることの技術を有していることによって「大工」とみなされるといえる。このことは、怪我や病気によって、家の建築にかかわることができなくなれば、もはや「大工」とはみなされなくなるということである。それに対して、怪我や病気によってもはや家の建築に関わることができなくなったとしても、「世間」における「場」としての「先輩」は「先輩」のままであるだろう。

以上のことは、「世人」と「世間」では、規範性のあり方も異なることが示している。たとえば「大工」の仕事は、家を完成させるという目的への適切性から規定されるといえる。熟練した大工とは、その家に適した建材を選び、それを適切に加工できるという、その目的を適切に実現する技術や知識を持っている者であり、その目的への適切性から「すべき／すべきではないこと」が規定されている。そのため、明らかに間違った道具を使用した場合などは、年少者であったとしても反論ができるはずである。それに対して、「世間」においては、たとえば挨拶の仕方がグループ毎で異なっていたりするように、その規範は恣意的であり、なぜそのような挨拶なのかということに合理的な理由は見いだしにくいといえる。

日本人は「世間」の中に生きているが「世人」としては生きていない、というわけではなく、日々「世人」でありつつ「世間」の中にも生きているというべきだろう。先程の「大工の先輩」という例は、「大工」という「世人」であるとともに、「世間」において「先輩／後輩」という関係のうちにもあることを示している。そのため、本当であれば「大工」としては指摘しなければならない誤りも、日本の「世間」の中では、「先輩」に対しては指摘しにくいのだといえる。

### 3.3 なぜ不安に襲われるのか

前項では、『存在と時間』の世人論を参照することで、我々が「世間」の内で「世人」として生きているという重層的なあり方をしていること、すなわち我々は「世間」の規範だけではなく、「世人」としての意味・規範にも拘束されていることを明らかにした。以下で主題的に考察したいのは、ひきこもり問題の解決法として『存在と時間』の「非本来性－本来性」という枠組みにおける実存の変容の議論がどこまで有用かということである。

ひきこもりという状態が、決して安楽な状態ではないということは、1.2で紹介したとおりであるが、本項ではより具体的に、何者でもないことと、意味の喪失という現象に焦点を合わせたい。勝山は、ひきこもることで「自分を空っぽにして」、「何も持たない人間に」なり、ゼロから始めることを提唱するが、同時に「自分が何者でもないという状態は不安だ。怖い。結局、自分のすべてが借り物だったということに気づかされる」（勝山2001, 16; cf. 勝山2001, 111）と述べている。すなわち、世人としてすべきことを拒絶することで「何者でもなくなった」わけであるが、その状態は不安や恐怖を引き起こすのである。また、当事者である上山和樹は次のように述べている。

……この当時から、僕はしきりに、「何もない、空虚で放置された時間と空間」を強く意識し、これに怯えるようになった。いま、自分は放置されている、何の意味づけも保証もない時間と場所で、一個の肉塊として……。目の前にある机も、じゅうたんも、部屋の隅も、異様にすべてなんだか狂いたくなるほど〈放置〉されている……何か重大なものから……いや重大なものがない……。放置されていることに気づいて、何もないことに気づく。「神がない」ことへの激怒のような感覚。

四六時中、この襲ってくるめまいのような空虚感に、さいなまれつづけた。友人といっても、歩いていても、家の中にも、「いま、自分がここにこうやっていること」が、ど

ここにもなんにも保証を得ていなくて、完全に宙吊りに放置されたままどこにも寄る辺がない。吐き気のような、めまいのような空虚感。事故のように向こうから襲ってくる空虚感（上山2001, 51）。

ここで指摘されている「空虚感」とは何であろうか。同書の別所を参照すれば、「いま、自分がココでコレをしている」ことの権威づけの不在、すなわち「〇〇の理由があるから、この僕の存在との取り組みとは、絶対的に承認され、期待されている」ことの不在であり、それにより自分のいる場所としている事とこの時間が「永遠に中空に宙吊りになって」しまい、「引っかかる」ポイントがない」ために、「時空間はすべて、動機を失ったままノッペリとしたまま仕方なく存在しているようにしか見えな」くなり、「こわくて仕方がない。どこにも寄る辺がない」という感覚である（上山2001, 51-2; cf. 聞2005, 33-5）<sup>(15)</sup>。

しかし、なぜひきこもることで、不安に襲われたり、さらには世界の意味の喪失が引き起こされるのだろうか。『存在と時間』における不安についての分析を参照しつつ、考察してみたい。

我々は世人として世界の物と関わり合いながら自他を了解している。以上のような世界が無意義化されたときに生じる気分が『存在と時間』において不安と呼ばれる。不安は世界の意味を崩壊させることによって、配慮されたものとしての世界や、世人の公共的な被解釈性から、おのれを了解する可能性を現存在から奪い、現存在に「最も固有な存在しうることへの存在」を閃かす（SZ, 187f., SZ, 343）。すなわち不安とは「良心の呼び声」として、「世人」へと本来的な自己を喪失している現存在に現存在自身が呼びかけ、本来的な自己存在しうること（Selbstseinkönnen）を了解するように促す気分である（SZ, 267f., 343）<sup>(16)</sup>。

『存在と時間』の「不安」論から、ひきこもりの人々が不安に襲われ、意味の喪失に陥る理由を理解することができる。ひきこもりとは「世人」としての「誰」に課せられた意味・規範を拒絶したのであり、それによって「何者でもなくなった」ために、「いま、自分がココでコレをしている」理由が見いだせない状態といえる。そして、大工の世界は、自らを「大工」として了解することから開けていたように、我々がその内で生きている世界の意味は、自身が「誰」であるのかということと密接に関係している。それゆえ、ひきこもることによって自らの「誰」が規定されず、「何者でもなくなる」ことによって、そこを起点に意義付けられていた世界の意味の喪失が引き起こされたのだということができる。

### 3.4 死への先駆的決意性

3.2では、「世間」の中に生きている者は、「世間」と「世人」という二重の規範に拘束されていること、3.3では、そのような「世人」としての「誰」を拒絶しているために、ひきこもりの人々は不安に襲われ、世界の意味の喪失を体験していることを確認した。本項では、『存在と時間』の立場から、ひきこもり問題の解決の方途を提案したい。ひきこもり問題の解決を図式化すれば、以下となるだろう。

図1 ひきこもり問題の解決(1)

世人・世間の束縛 —— (不安・意味の喪失) —— 「？」 ——▶ 解決(苦しみの解消)?

以上の図1において、「？」が何なのかということが問題となる。そして、ハイデガーの立場からの回答は、そのような世人としての意味を不安を通じて無意義化したうえで、死へと先駆し、自らの固有な可能性を取り返すこと、あるいはそこから世界の意味を新たに再形成することとなるだろう。

『存在と時間』において死は、「現存在の最も固有な、没交渉的な、確実な、しかもそのようなものとして無規定的な、追い越しえない」(SZ, 309)可能性とされる。すなわち、他者によって引き受けてもらうことができないため、死が切迫するとき、現存在は「おのれの最も固有な存在しうることへ向かって」指示されるのであり、また、追い越すことができないために、死は「最も極端な可能性」とされる(SZ, 257f.)。

死という「最も極端な可能性」へと指示されることによって、「現存在においては他の現存在とのすべての交渉は断たれている」(SZ, 250)ことになり、現存在はおのれ自身へ向けて単独化(Vereinzelung)され、あらゆる「のもとでの存在」と他者たちと共存在とが拒絶される。それゆえ死とは、「最も固有で没交渉的な可能性」でもある。

以上のような可能性としての死への現存在の関わりが、可能性を可能性として形成し、持ち堪えることとして、術語的に「可能性のうちへの先駆」(SZ, 262)と表現される。死という追い越しえない可能性へ先駆することによって、その手前に広がっているすべての可能性がともに開示され、現存在は終わりのほうから(von Ende her)、おのれの全体性を有限的に(endlich)了解する。

以上のような『存在と時間』の立場は、以下のように図式化できるだろう。

図2 『存在と時間』における実存的変容

世人・非本来性 —— (不安・意味の喪失) —— (死への先駆的決意性) —▶ 本来性

この「死への先駆的決意性」は、現在「ひきこもり」のただなかにいる者にとって有益な指示、すなわち図1における「？」となりうるだろうか。熟考するまでもなく、そんなはずはないだろう。ひきこもっている者に対して、「良心の呼び声に促されて、死へと先駆的に決意しなさい」と告げることは、非倫理的な要求であるだけでなく、ひきこもりの人々や支援者の証言が示していたように、ひきこもりという状態は「他者の介入」なくしては解決不可能なのであったことを踏まえれば、間違った指示といえるだろう。すなわち、支援者たちの発言を鑑みれば、ひきこもりの解決とは、下図のように書き換えられる。

図3 ひきこもり問題の解決(2)

世人・世間の束縛 —— (不安・意味の喪失) —— (他者の介入) —▶ 解決(苦しみの解消)?

図1における「？」に、「死への先駆的決意性」が入らず、「他者の介入」が入るとすれば、それはなぜだろうか。

### 3.5 ハイデガーの不十分性

3.4の考察は、「世人」から脱却することと「世間」から脱却することとは位相を異にする、ということを示唆しているかもしれない。たとえば、我々は「大工」や「教員」、「学生」であるが、その仕事に飽きたときに、それを辞めることができるのに対して、「長男」をやめること、あるいは「普通(成人なら、働いている)」から脱却することは、より困難であるといえる。

ハイデガーの議論がひきこもりの人々への処方箋となりえないのは、ひきこもりの人々は「世人」として生きているだけでなく、「世間」のなかにも生きているためである、と「一先ず

いうことができる。ひきこもりとは、現代のヨーロッパにはすでに消失している「世間」と関係しているがゆえに、ハイデガーの議論では不十分であり、「先駆的決意性」は通用しないということができるかもしれない。しかし、『存在と時間』において、不安は世界の意味を崩壊させるものであり、「世人」としての「誰」だけではなく、「世間」における意味・規範もまた無意義化されていると解することもできるだろう。それゆえ、ヨーロッパにおける「世間」の不在が、「先駆的決意性」がひきこもり問題の解決とならない理由であると即断することはできない。ひきこもり問題が「他者の介入」によってのみ解決されるということは、ひきこもりの人々を苦しめている意味・規範の再構成が、上述のような現存在が現存在自身に呼びかける「不安」や単独でなされる「先駆的決意性」によってでは困難であることを示しているのではないだろうか。

このことは、『存在と時間』において意味が共有されていることは洞察されていても、その習得の局面が看過されていたことと相関している。無論、ハイデガーは、『存在と時間』において、我々がすでに「被解釈性」の内にあり、そこでの解釈がすでに明確ではないが先持（Vorhabe）されている意味について、何らかの先視（Vor-sicht）に基づき、特定の先概念（Vorgriff）を当てはめることであることを洞察していた（SZ, 150f.）。すなわち、すでに理解されている意味のなかで循環運動としてなされる解釈において、意味は形成・改変されていくために、「存在の問い」を問うためには、我々がすでにその内にいる「被解釈性」に気づき、それを解体（Destruction）しなければならないことが指摘されている。しかしハイデガーが看過していたのは、我々が幼少時よりそれをいかにして習得してきたのか、ということである。別言すれば、『存在と時間』第一篇第四章において、存在者の意味としての世界は他者（共現存在）とも共有された「共世界」とされるが、そのような「共世界」がいかにして習得・形成されたのか、そしてその局面における〈他者〉の存在の重要性を、ハイデガーは看過していたのではないだろうか<sup>(17)</sup>。

#### 4. いかにして意味は習得されるのか

規範的な意味に縛られていることがひきこもり状態を引き起こす理由の一つであるとすれば、『存在と時間』においてハイデガーが提示したような、不安において世界の意味が無意義化されたうえでなされる死への先駆的決意性が、ひきこもりの問題を解決する手掛かりとなるのではないか、とも思われる。しかし3.の考察が示したのは、ひきこもりの知見からすれば以上

のような見通しは楽観的すぎることであり、むしろ『存在と時間』の思索自体に盲点があることであった。

ひきこもり問題が「他者の介入」によってのみ解決されることが示しているのは、共有された意味を再構成すること、そしてこれまでには見いだされていなかった可能性を見いだすことの困難さであり、それを独りで行うことの不可能性であるといえる。本論文のここまでの考察は、意味の再構成における〈他者〉の存在の重要性を示唆していたが、しかし、なぜ、いかにして他者の存在が関与するのかは未解明にとどまっていた。本節では、意味の構造を解明することによって、意味の形成において他者の存在が不可欠であることを示したい。

まず4.1では、ダントの物語文の構造を確認したうえで、それによって道具の意味および世人としての「誰」の意味を捉えることができることを示す。続いて4.2では、認知言語学の知見を参照しながら、意味とは「否定」を介して形成されることを確認し、その上で4.3では、大澤真幸の「求心化-遠心化作用」を参照し、4.4では、その「否定」を行うのが〈他者〉であることを示す。

#### 4.1 ダントの物語文から「道具」と「世人」の意味を考察する

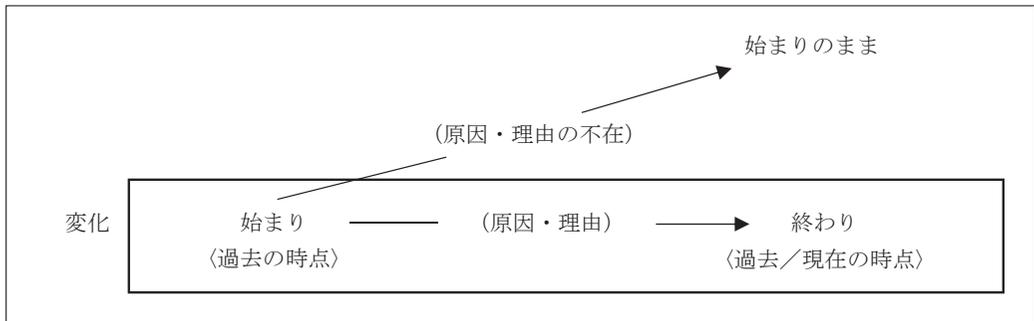
すでに論者は、ダントの物語文について論じ、それをを用いて道具の意味や世人としての意味の構造を解明したことがある（木村2016; 木村2019a）<sup>(18)</sup>。歴史を物語るとは過去を組織化することであり、ダントはその物語の最小単位を、ある出来事と別の出来事間の変化を説明するものとしての「物語文」であるとする。歴史を物語るとは、相互に脈絡のない出来事の羅列として記述するのではなく、関連のある出来事を取り上げ、あるいは関連のない出来事を除外したうえで、その変化を説明することである。さらに、「始まり（Anfang）」としての出来事に何が選ばれるのかは、「終わり（Ende）」（結果・帰結）としての出来事から規定されるのであり、すなわち物語ることとは「終わり」から規定されるような「始まり」から「終わり」へとどのように／なぜ「変化」したのかを「説明」することとされる（Danto 1980, 394）<sup>(19)</sup>。

以前の論文で指摘したように、物語文が「変化」を説明するというときには、その変化が生じたことの説明としての原因や理由が起こらなければ、「終わり」が起こらなかったという認識が伴わなければならない。別言すれば、「始まり→終わり」という変化の説明として、物語文が機能するためには、「始まり→終わり」が必然的ではないこと、すなわち「終わり」とならない可能性が見てとられていなければならないだろう。

たとえば、ダント自身が用いている「バンパーがへこんでいる」ことに対する物語文では、

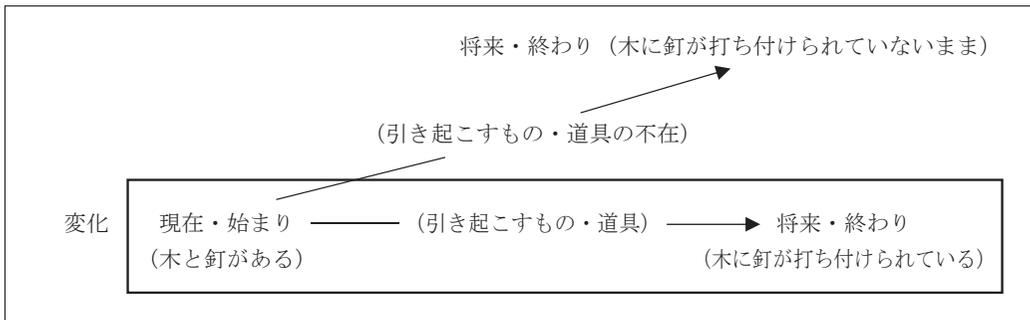
「へこんでいないバンパー（始まり）→へこんでいるバンパー（終わり）」という変化がいつどのようにして起きたのかが説明されるが、その説明の要求は、そのような変化の原因・理由がもし生起していなければ「終わり」は生起しなかつたはずだろう、という認識を前提としていえると考えられる。すなわち、我々は結果・帰結としての「終わり」を必然的なものではないと見なす限りで、言いかえれば、「終わり」が起きなかった可能性、その原因・理由が生起しなければ事態は変化せず、「始まり」のままだったであろうという可能性が視野に入る限りで、「始まり→終わり」という変化についての説明を有意味に物語りえるのである。以上の議論を踏まえるならば、物語文の構造を下図のように示すことができるだろう。

図4 物語文の構造



以上の物語文の構造を用いて、『存在と時間』における道具の性格を捉えることができる。『存在と時間』において、道具の存在性格とは「でもって」と「のもとで」という「目的-手段」の連関において捉えられている。たとえば、トンカチとは（釘を木に）「打つために」ある道具として、しかもペンチやノコギリなどとは異なったものとして理解されている。トンカチを使用する局面においては、「現在・始まり」（たとえば、木と釘がある）において「将来・終わり」（たとえば、釘が木に打ち付けられている）が予期され、「現在・始まり」から「将来・終わり」への変化をもたらすためのものとして「トンカチ」が理解されている。このような「使用」の局面においても、その道具を用いなくても「将来・終わり」が生起するとすれば、道具を使用する意味はないために、「将来・終わり」はそうでない可能性との対比において捉えられていなければならないといえる。それゆえ、道具の意味の構造は下記のように図示することができるだろう。

図5 道具の意味の構造



同様の構造によって、前節で考察した「世人」も捉えることができるだろう。我々が自他を「大工」として理解しているとは、「始まり」（たとえば、建材がある）を「終わり」（たとえば、完成した家）へと変化させることができる者として理解していることといえる。たとえば、修行中で十分にその変化を引き起こすことができない者は、「大工」として未熟であり、まだ「一人前の大工ではない」として理解されているだろうし、あるいは怪我や加齢によって大工に必要な技量を喪失した者、すなわち「始まり→終わり」という変化を引き起こすことができなくなった者は、「大工」として理解されなくなるだろう。以上を図示すると、下図となる。

図6 「大工」の意味の構造

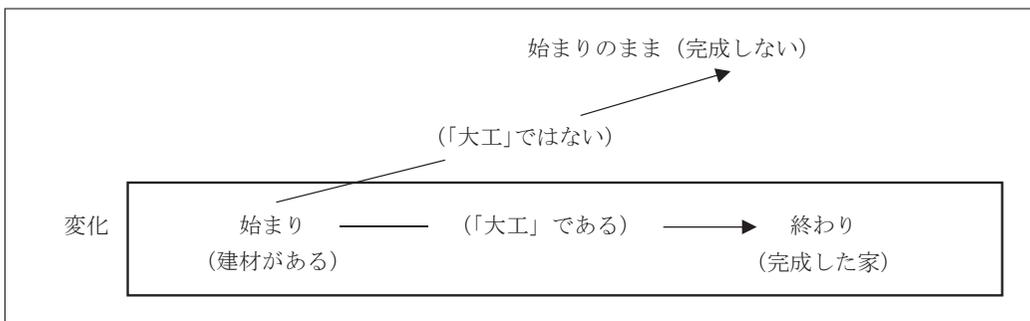


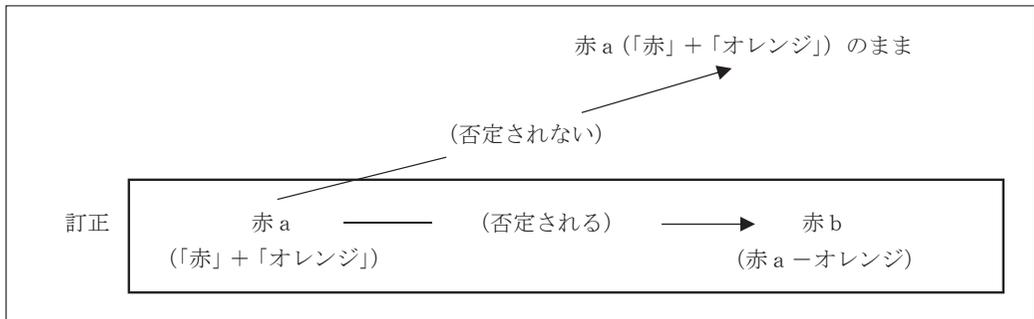
図6と図5を対照することで判明となるのは、道具（たとえば、トンカチ）と「大工」との理解が同様の構造を有するということである。すなわち自他を「大工」として理解するということは、その者を目的を実現できる者という意味で道具的に理解することであるといえる。

## 4.2 言語の意味の習得

以前の論文で論者は、意味の構造を析出するために、認知言語学の知見を参照した（木村2020a）。今井によれば、「言葉の意味を知る」とは、辞書に書かれているような言葉と言葉の結びつきを覚えることではなく、意味の体系全体のなかで、一つ一つの言葉が指し示す範囲とその境界を知ることである（今井2013, 149f.; 今井2016, 52）。たとえば、「赤」という言葉の意味を本当に理解するためには、自分の母語で「色」という概念全体が、いくつの基本的な語でどのように切り分けられているかを把握しなければならない。

思考実験として、「オレンジ」という色も「赤」であると思い違いをしている子どもの理解が訂正されるという場面を想定してみよう（その子の理解している、「赤+オレンジ」の赤を「赤 a」と呼称する）。その子どもが「赤」に対して「赤 a」と呼んでいたり、大人が「赤」を「赤」と呼んでいる際には、誤解は判明とならず、訂正されない。そうではなく、その子どもがオレンジに対して「赤 a」と言った際に、それを大人によって訂正（たとえば、「それは「赤」ではなく「オレンジ」というんだよ）されることや、その子どもが「赤 a」だと思っているオレンジに対して「オレンジ」といわれるのを聞くこと、すなわち「否定」されることによって、修正される。

図7 「赤」という色を「赤+オレンジ」と思っていた子どもの理解が訂正される



このことが示しているのは、「赤」は「赤ではない色（青、黄、オレンジ…）」ではない」という仕方で規定されているということである。すなわち、「赤」の意味とはそれ自体だけで成立するのではなく、また実際の色（赤）との対応のみによって成立するのでもなく、「他の色ではない」という否定を介して輪郭づけられるのである。

以上の認知言語学の成果は、適合した意味の習得のためには、「否定」という契機が重要で

あることを示している。しかし、さらに問わなければならないのは、その「否定」はいかにしてなされるのか、ということである。たとえば、「物が落下する」というような自然現象であれば、それは観察や実験によって確認されるだろう。しかし、上述したような「色名」は文化によって異なるという意味で恣意的であるが、世界を区分けするそのような「体系」としての意味は、いかにして習得されるのであろうか。

#### 4.3 「求心化－遠心化作用」と「第三者の審級」

前項では、意味の形成における「否定」の契機の重要性が明らかとなった。本項では、そのような「否定」がいかにしてなされるのかについて考察したい。その際に、手掛かりとしたいのは、山本が「空気」の発生原理であるとした「臨在感的把握」である。2.3では、感情移入することによって臨在感的把握がなされ、その対象は「ただの物」ではなくなるとされたが、しかし「ただの物」とは何かということと、そこから「読まれるべき」規範性がいかに生成されるのかということまでは明らかにできなかった。以上の課題に応答するために、本項では大澤真幸の「求心化－遠心化作用」によって「臨在感的把握」をより精緻に捉え直すことを試みる（両概念が一致するかどうかは、5.2で結論を出す）。

論者は以前の論文において、大澤真幸の「求心化－遠心化作用」について論じたことがある（木村2019a）。本論文に資する限りで略述するならば、我々がある内容を志向する際、その志向作用には相反する方向性がもともと備わっている。大澤は「その対象を、私の近傍の内に配備」（大澤1994, 68）し、その結果「こちら」に求心点としての「自己／私」を結実させる作用を「求心化作用」と呼ぶ。それに対して、「求心化作用」と連動し、「あちら」に遠心点としての「他者」を結実させる「心の内の対象が私から遠隔化していく作用」（大澤1994, 68）が「遠心化作用」と呼ばれる。別の言い方をすれば、あることがある現象として規定されたとき、「求心化作用」とはその現象への作用を現わす働きであり、「遠心化作用」とはその現象からの作用を現わす働きであるといえる<sup>(20)</sup>。

大澤の議論のユニークな点は、個別の身体というマイクロな単位から、社会的な規範というマクロな現象を説明するところにある。大澤は「求心化作用－遠心化作用」が複数集合することによって、「志向作用の対象が、[...] 間身体的連鎖に組み込まれているどの特徴的な個体の志向作用に対しても既存性の相のもとに現前し、かつどの特徴的な個体の志向作用に対しても自らの恣意的な改変から独立したものとして現前することになる」（大澤1990, 58）とし、それぞれの志向作用の間の差異が無化され、「求心点と遠心点——自己と他者——が、互いに他を反

射しあうことによって、同化してしまう」(大澤2015, 328)と述べる。すなわち、同一のものを複数で志向することによって、「間身体的連鎖の共帰属性」が成立し、それぞれの志向作用とは独立した、ひとつの抽象的な志向作用、すなわち、「第三者の審級」(大澤2015b, 244)として現れるとされる(大澤2015, 99-100, 330, 426)<sup>(21)</sup>。

重要であると思われるのは、この「第三者の審級」によって眼差されたものは、第一に「既在的な(すでにあった)」ものとして、第二に個別的な(私の)志向作用に対して「独立した」ものとして現れる、という点である。別言すれば、「[「正式な様態」であるかの如く]、一つの「規範(的に妥当なもの)」(大澤2015, 99)として、あるいは「真実態」(大澤1990, 58)として現れる、という点である(大澤2015, 244)。

重要であるのは、「求心化-遠心化作用」の次元にまで遡行すれば、意味や規範を制定し承認するのは、本当はこの志向作用(「われ」)であるにもかかわらず、その自己準拠性が隠蔽されるという点である。つまり、「第三者の審級」とそれに眼差される意味が「すでにあったもの」として現れるのは、「後からくるものによる、先行する場所への構成」(大澤はこのような作用を「先行的投射」と呼ぶ)であり、「擬制」であるが、それは隠蔽されるという点である(大澤1990, 59, 62; 大澤2015b, 244, 329, 331)。

意味や規範の成立がこの志向作用(「われ」)によるものであるならば、意味や規範はこの志向作用の任意による恣意的で偶有的なものとなり、それぞれの志向作用間で意味や規範の共有はなされないことになる。しかし、「第三者の審級」が「先行的投射」によって擬制されることで、その偶有性と共有されていないかもしれない可能性が隠蔽され、意味は「規範」「真実態」として現れるのである。

#### 4.4 〈他者〉による否定

4.2では、物の名前を適恰的に習得するためには、「否定」という契機が重要であるとされたが、その「否定」がいかになされるのかという問いが残った。前項の考察は、求心化-遠心化作用によって成立する〈他者〉こそが、「否定」をなす者であることを示している。たとえば、「ダメダ」と繰り返すオウムに言われるのと、〈尊敬する先輩〉に「駄目だ」と言われるのとでは、後者のほうがより強い「否定」として機能するといえるが、それは求心化-遠心化作用を行うことによって、先輩が〈他者〉として現れているためといえる。このような〈他者〉とは、別の可能性が開かれたうえで、その別の可能性を選択せずに、この可能性を選択することができる者であるといえる。すなわち、先輩の「駄目だ」が「否定」となるのは、先輩には

そうしないという可能性が開かれているにもかかわらず、それでもあえて「否定」したためである。それに対して、オウムの「ダメダ」が「否定」として機能しないのは、オウムにはそのような可能性が開かれていないとみなされているためといえる<sup>(22)</sup>。

3. においてハイデガーの世人論を確認したが、ここまでの議論を踏まえれば、「世人」としての自己理解の形成についても新たな光を当てることができるだろう。たとえば、「何かを作る人=大工」と理解し、壺を作る職人や芸術家も（間違っ）「大工」と理解している子どもを想定してみよう。そのような子どもは成長するにつれて、〈大人〉が絵画を描いている者を「ダイク」とは呼ばない、あるいは「ダイク」と呼んだときに〈大人〉によって訂正されるという「否定」の経験をすることによって、我々の理解している「大工」の意味へと到達するのだといえる。

## 5. ひきこもり問題は〈他者〉の介入によってのみ解決する

本論文では、まず1. において、ひきこもりとはどのような状態であるのかを確認したうえで、2. においてひきこもりの人々を苦しめているものが「世間」の意味・規範への適応であることを指摘した。そのうえで、3. では、ハイデガーの「世人」論を検討することで、我々が「世間」と「世人」という二重の規範の拘束のもとにあることを示すとともに、彼の「先駆的決意性」がひきこもり問題の解決とならず、「他者の介入」が必要なのはなぜかという問いを提起した。4. では、なぜ「他者の介入」が必要であるかを捉えるために、まず意味の成立の局面を、ダントの「物語文」を用いて考察し、「否定」の役割を捉えたうえで、その「否定」をなすのは、求心化-遠心化作用によって見いだされる〈他者〉であることを明らかにした。

本節では、以上の考察を踏まえて、まず「空気」および「世間」が成立する機制を考察する(5. 1, 5. 2)。そのうえで5. 3では、「世人」と「世間」では、その成立の機制が異なることを明らかにする。5. 4では、ひきこもり問題の解決のためには、〈他者〉の存在が必要である理由を解明する。最後5. 5では、ここまでの意味・規範についての成果をまとめたうえで、『存在と時間』における「先駆的決意性」が、ひきこもり問題を解決するための処方箋とはならない理由を明らかにする。

### 5. 1 空気の機制の分析

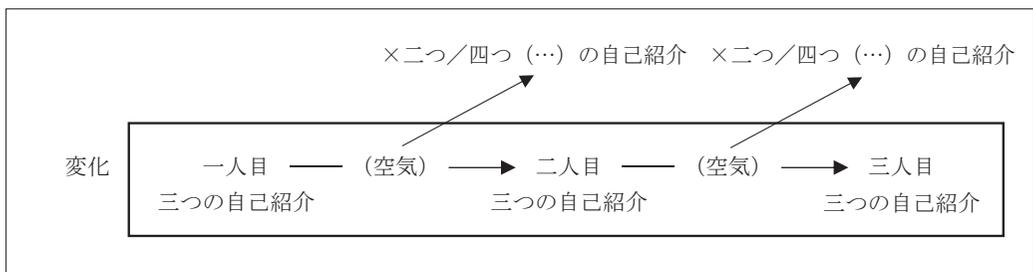
前節では、意味の習得・形成・修正のためには、求心化-遠心化作用が働き、「否定」する

者としての〈他者〉が見いだされなければならないことを明らかにした。しばしば「空気を読まない（読めない）」ことは、その場の暗黙の規範を破ることであるように考えられるが、本項では、空気という規範がいかに成立するのかについて考察したい。空気が発生する状況についての、鴻上の印象的な例を参照しよう。

僕は、演劇の演出家なので、ワークショップという表現のレッスンをすることがあります。／30人ぐらいの参加者が集まり、まずは、丸く車座に座ります。／そして、順番に自己紹介をしていきます。／その時、最初の人が、「自分の名前、年齢、出身地」だけを言い、そのまま、次の人もその次の人も、同じことを言うと、いつのまにか、全員が自分の名前、年齢、出身地」だけを言うようになります。（鴻上2019, 77-8）

この場において、最初の者と次の者は、特に考えなしに三つの自己紹介をしたが、三番目以降の者はこれまで「三つの自己紹介」だったために、「三つの自己紹介」をするべきだと考え、「空気を読んだ」自己紹介をしたとしよう。この場での「空気」とは、どのような機制によって発生しているのだろうか。もし仮に、はじめに自己紹介のルールが明示されている場合は、「空気を読む」必要がなくなるだろう。しかしこの場では、二つ／四つ（…）の自己紹介をすることができるにもかかわらず、そうはせずに「三つの自己紹介」が連続したのである。それゆえ、三番目以降の者は、「三つの自己紹介」が連続した理由、すなわち別の自己紹介が可能であるにもかかわらず、そうはならなかった理由を見いだそうとし、「この場では、三つの自己紹介以外をしてはならない」という規範としての空気を読み込んだと考えられる。三人目以降の者の解釈を図示すると、以下となるだろう。

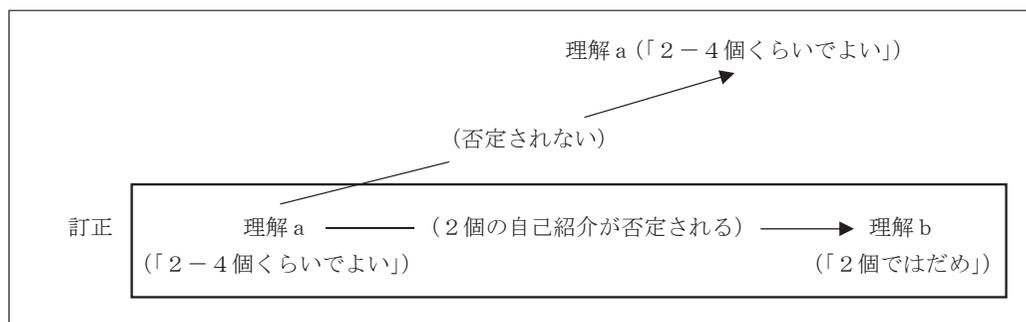
図8 自己紹介において、三つの自己紹介が規則化される状況



この状況で、「三つの自己紹介」が連続することによって、「二つ／四つ（…）の自己紹介」へと変化しなかった理由として、明示されていない規範が「空気」として見いだされるのは、参加者同士が互いを〈他者〉とみなしているためといえる。すなわち、互いに対して求心化-遠心化作用を行うことによって、別様に自己紹介する可能性を「否定」する者として互いをみなしているからこそ、「三つの自己紹介をしなければならない」という空気・規範を読み込むことができるのである。

以上の例よりも、より明確な「空気」が発生するのは、その場に教師が特にルールは指示しないが、一人目が三つの自己紹介をしたときには何も言わないにもかかわらず、二人目以降が二つ／四つの自己紹介で終えようとしたときに、咳払いや舌打ちをした場合である。この場合、最初の例よりも、より強く「否定」が強調されることにより、空気の規範はより明確となる<sup>(23)</sup>。この際の理解の訂正を図とすると下記となる。

図9 「自己紹介は2-4個くらいでよい」という理解が訂正される



以上のことから、空気の規範は、「～しろ」という明確な内実を持つわけではなく、「～するな」という曖昧さを有するということができる。4.2において、「赤」の意味が「赤ではない色」ではない」という「否定」によって輪郭づけられるとされていたように、空気の規範もまた「～するな」という否定の体系として形成されている。すなわち、二つだけの自己紹介が咳払いによって否定されることによって、「2個ではだめだ」ということが理解される。そのうえで、4個の自己紹介がされたときにも咳払いがなされたならば、「2個でも4個でもだめだ(≒3個の自己紹介をしなければならない)」という理解が成立するのである<sup>(24)</sup>。

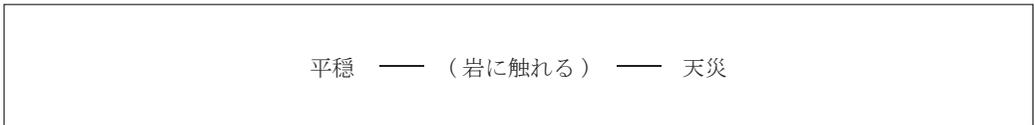
「空気」の規範とは、このように輪郭が定かではないため、法律や契約のように明文化しえず、空気が侵犯される前には、その規範の内実は当事者たちにすら明確化されていないことが多い。たとえば、我々は「2個以上言うが、5個以上は言わないようにしよう」と規範を明

確化したうえで、自己紹介をはじめめることは稀であるだろう。我々は何となく「適切な」自己紹介をしようとするのであり、短すぎたり長すぎたりする自己紹介に直面してはじめて、「短すぎず長すぎないように自己紹介をすべきだ」という規範を有していたことに気付くのである。

## 5.2 「世間」の機制の分析

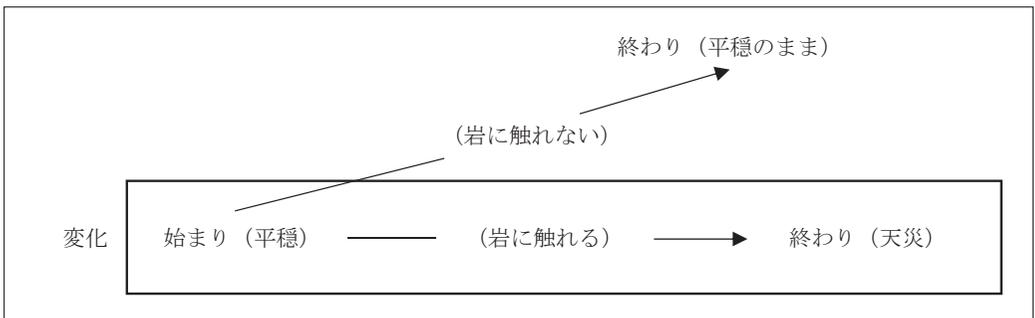
以上で空気という規範が発生する機制が明らかになったといえるが、前項の考察に基づいて、「世間」の規範（掟）が成立する機制を理解することができるだろう。たとえば、ある岩に触ったことと天災が結び付けられ、「その岩に触ってはならない」という規範（掟）が成立するというケースを考えてみよう。近代的・科学的な世界観においては、二つの出来事は別々の出来事であるとみなされる。

図10 近代的・科学的な世界観（理解a）



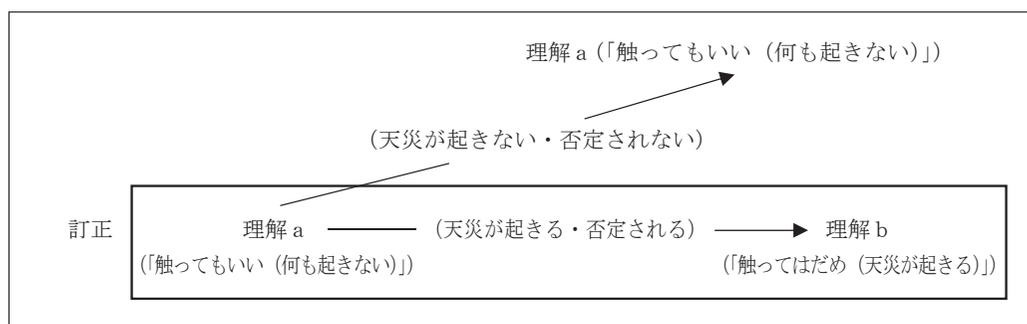
しかし、その岩について求心化 - 遠心化作用を行い、そこに〈他者〉を見出すことによって、「その岩に触ったために、天災が起こった」と物語ることが可能となる。すなわち、岩を〈他者〉、つまり「終わり」を選択しうる者とみなしたうえで、「終わり」（天災）が、前の出来事（岩に触る）がなければ起こらなかったこととして、現実とは異なる可能性（「平穩のまま」との対比において捉えられているのである。

図11 物語文「岩に触った」から「天災」が生起する（理解b）



我々は日常「岩に触る」以外にも様々な行為を行っており、そのすべてが天災の生起の理由となるわけではない。岩に触ることが天災の理由となるのは、まず岩に対して求心化 - 遠心化作用を行い、そこに「平穩のまま」という可能性を選択せず、「天災」を選択することで、「岩に触れる」ことを「否定」する〈他者〉を見いだしていたためである。このように〈他者〉を見いだすことで、図11のような仕方で天災を解釈しえるようになるのであり、そこでは次のような理解の変容が起きているといえる。

図12 「岩に触ってもいい（何も起きない）」という理解が訂正される



理解 a 「触ってもいい（何も起きない）」とは、近代的な世界観の図10が示しているような理解である。この場合、「天災」は「岩に触れる」という行為の「否定」であるが、それは同時に理解 a の「否定」でもあり、そのことによって理解 b へと変化したわけである。仮にその岩に対して求心化 - 遠心化作用を行わない場合は、何度「岩に触る」ことの後に「天災の生起」があっても、上記のような理解の訂正は起こりえないだろう。それゆえ、岩をただの物ではなく、「否定」する者としての〈他者〉とみなすことが、決定的な重要性を有している。

ここまでの考察を踏まえることで、2.3で検討した山本の「臨在感的把握」とは、4.3で考察した「求心化 - 遠心化作用」であったことが判明となる。たとえば、遺跡の骨に「臨在感的把握」を行った日本人だけが気分が悪くなった例とは、その骨を「ただの物」ではなく、「崇る」などの仕方で「終わり・結果」へと影響を及ぼしうる〈他者〉とみなしていたと解釈することができる。

図12における訂正された理解が成立したうえで、さらに、たとえばその岩を祭ることなどによって、複数の身体が同時に求心化 - 遠心化作用を作動させ、間身体的連鎖がなされることによって、「我々」が「第三者の審級」へと擬制されることになる。このことによって、複数の

身体間で共有された図11の説明（図12の理解b）が「我々の解釈によるもの」ではなく、「先与のもの」として感覚されることになり、「世間」の規範（掟）となると考えられる<sup>(25)</sup>。

### 5.3 「世人」と「世間」との機制の相違

3. において意味・規範には、「世間」と「世人」のものという二種類があることが確認されたが、その生成の機制が異なることが、5. のここまでの考察から判明するだろう。まず示されたことは、「空気」とはその場に存在するものに対して臨在感的把握／求心化－遠心化作用を行うことによって、それらを〈他者〉とみなし、その「否定」を介することで生成されることである。さらに、「空気」と同じ機序で形成された規範が、「第三者の審級」によって承認されることで、「われわれ」が制定したのではなく、先与のものとして感得されるときに、「世間」の規範（掟）が成立するといえる。このように、「空気」と「世間」の成立には、臨在感的把握／求心化－遠心化作用によって見いだされる〈他者〉による「否定」が大きな役割を果たしている。

それに対して、3. において確認されたような、「世人」の「誰」は、道具と同様の構造を有することによって、目的－手段の連関に組み込まれている。「世人」としての「誰」が何をすべきか、いかにあるべきかということは、目的との関係で規定される。たとえば、「大工」であれば、木を切ったり釘を打ったりすることは「家を完成させる」という目的を実現するために「すべき」ことといえるが、歌を歌ったりダンスを踊ったりすることはその目的と無関係ゆえに「すべき」こととはみなされない。このように、「世人」に関しては、目的への適合性によって優劣（「優れた大工」／「半人前の大工」）や規範（「すべき／すべきではない」）が決定されるのに対して、たとえば「先輩」／「後輩」という区別は、その集団に属している時間の長さによって決定され、「先輩としてすべきこと」やどのような先輩が「良い先輩」であるのかは、目的によって規定されないといえる。

この目的からの規定性の有無は、反論・再構成の可能性にかかわる。たとえば、大工が「家を作る」という目的に反する行為をした場合には、施主や同業者はそれに反論することができるだろう。あるいは、仮に従来の道具（たとえば、「ノコギリ」）に愛着があったとしても、目的により適合した道具（たとえば、「チェーンソー」）が発明されれば、そちらを用いるべきといえる。すなわち、「世人」の規範は目的に合わない場合は、反論・再構成可能であり、相対的に「柔らかい」といえる。それに対して、「世間」の規範（たとえば、「先輩には敬語を使わなければならない」）は目的から規定されていないため、反論・再構成が困難であり、相対的

に「硬い」といえる。また、「世間」の有する「神秘性」という不合理な性格（本論文2.2）は、「世間」が「世人」とは異なり、目的によって規定されていないためといえる。

また、目的の有無は、それぞれの規範の拘束の範囲を規定している。たとえば、「大工」としての規範は、職場を離れば解放されるであろう。また、たとえば生活費を稼ぐために「大工」となった者は、宝くじで大金が当たれば、「大工」をやめることができるように、それでいつづけるのかどうかは、選択可能といえる。それに対して、「世間」の規範（たとえば、「長男だから家を継ぐべき」、「成人であれば普通はみな働くべき」）は、「長男」や「成人」をやめることが原理的に困難であるため、そこから逃れることが難しいといえる。

このことは、ひきこもりの人々の苦しみ的一端を明らかにするだろう。というのは、ひきこもることによって、「世人」としての「学生」や「会社員」であることをやめたとしても、「世間」からは解放されず、その規範に縛られ続けているためである。さらに、先述したように、そのような「世間」の規範は、目的によって規定されていないために、反論・再構成が困難なのである。

#### 5.4 ひきこもりが「問題」でなくなるとき

ひきこもりの人々がひきこもった理由のひとつは、「誰」（優等生）<sup>(26)</sup>を演じることの困難さといえるが、実際にひきこもっている人々の苦しみとは、たとえば「成人であれば普通はみな働くべき」という世間の規範に適応できないことであるだろう<sup>(27)</sup>。「働く」ことを「普通」と理解している者の理解を図示してみよう。

図13 「働く」ことを「普通」と理解している者



「普通」という意味・規範を一度解体し、再構成することで、「働かないこと（ひきこもり）も普通である」という理解に至ることができれば、ひきこもりの人々は自己否定の苦しみから解放されるだろう。しかし、インタビューを受けたひきこもりの人々も、依然として「普通」に囚われ、そこに戻ろうと足掻いていたように、このことは容易にはなされえない。本論文の

成果から、この難しさを照明するならば、それは「普通」という意味・規範が、目的から規定されるような「世人」の規範ではなく、「世間」の規範であり、それゆえ目的への適合／不適合という観点から反論・再構成ができないためである。いわば、「普通」とは、それについての特段の根拠づけを必要とせず、「そうになっているもの」「そうすべきもの」なのである。

しかしそれでは、ひきこもり問題は解決不可能かといえば、そうではないだろう。というのは、「普通」を解体・再構成ができずとも、それを緩ませることはできるためである。「緩ませる」とは、たとえば、ほそと池井多が「私たちは、ひきこもりという汚名を着せられている立場を、たとえ受動的であっても毎日、選択している」と述べ、そのような「今日もハローワークに行かない、明日も行かない」（ほそと池井多2020, 277）という自分を認め、誇りを持つと述べているような仕方、「普通」を捉え直すことである。すなわち、彼は決してひきこもっている自分を「普通」とであるとみなしているわけではなく、それゆえ「普通」は解体されていないが、しかし、彼は「普通ではない自分」を否定するのではなく、認めようとしているのである。このような捉え直しは、いかにして可能となるのだろうか。

図14 「働く」ことが「普通」という理解が緩む

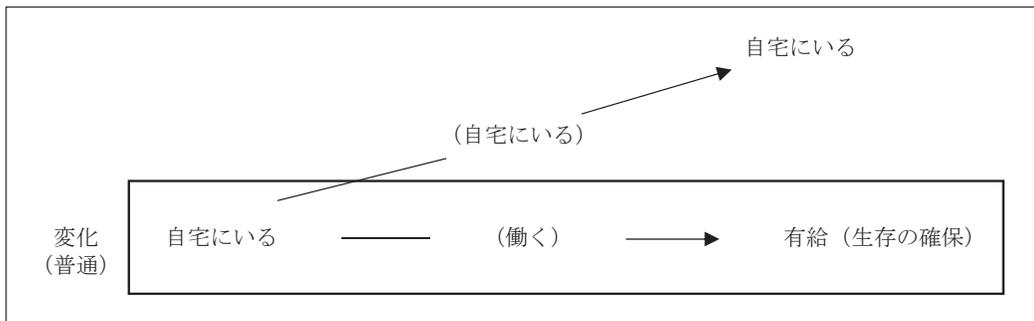


図13の理解において「働かない」ことが即「自己否定」となるのは、「普通」以外の可能性が見いだされておらず、それを選択する余地がないためである。それに対して、拡張された図14では、斜め上の矢印が選択しうる可能性として見いだされたことによって、「自宅にいる」ことはたとえ「普通ではない」としても、選択された行為となりうる。先程引用したほそと池井多の言葉は、図14のように複数の可能性が開かれたなかで、「普通ではない」かもしれないが、上方の矢印を「自分で選んだ可能性」として捉え直していると解釈できる。

しかし、「普通」が緩むことさえも容易にはなされえないだろう。このことは、会社員が勤

務日に出社する／大学教員が授業日に出校することを思い浮かべれば、理解できるだろう。しばしば、会社員／大学教員が、出社／出校することは「当たり前」であり、出社しない／出校しないことは、選択してよい可能性として開かれてさえいないのである。すなわち、「普通」とは、図14ではなく、図12のように閉じているからこそ、「普通」だといえる。

ひきこもりの人々が「他者の介入」を受け入れることで、あるいはひきこもり経験者のコミュニティに所属することで、しばしば救われていくことが示しているのは、この斜め上の矢印を見いだすことが「独り」ではなされえず、〈他者〉による「否定」を介して見いだされることである。たとえば、当事者である聞は「閉塞した状況を打破するには、今までとは違う新しい視点、新しい認識、新しい取り組みが必要なのである。そして、それには他者からのヒントがいいきっかけになる」（聞2005, 4）と述べ、自助グループで「同じ問題や課題を抱える仲間と出会い、友愛の中、自分を見つめ、物事との関わり方を改善してゆくと、新しい道が開けて」（聞2005, 5）ゆくと述べている<sup>(28)</sup>。しばしばひきこもりの人々はこのような境遇にいるのは自分だけであり、自分だけが「普通ではない」と思い込んでいる。自助グループの集いに参加することとは、そのような理解を〈他者〉によって「否定」されることといえる。すなわち、自分以外にも同様の境遇の者がおり、それぞれが苦しんでいること、さらにはひきこもりを選ぶというあり方を知ることによって、図13のみが選ぶことのできる可能性であるという理解が「否定」され、図14のように緩まされたのだといえる<sup>(29)</sup>。このことを図示すれば以下となる。

図15 「働くのが普通だ」という理解が訂正され、緩む

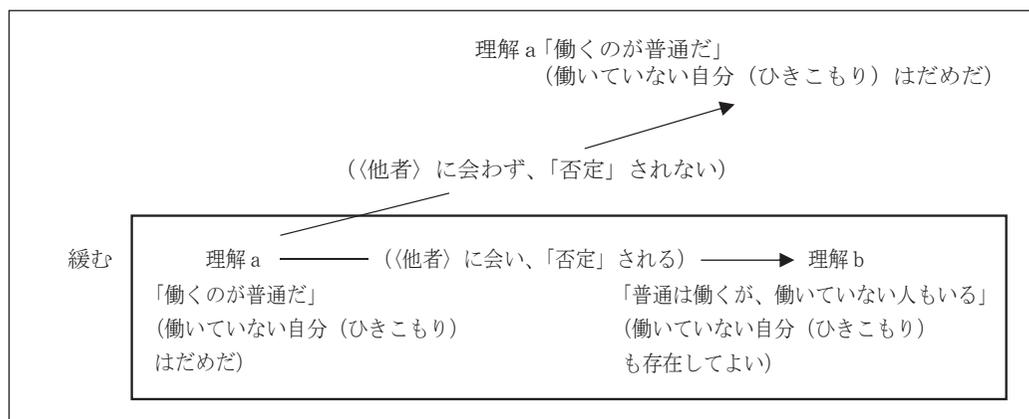


図15の理解bにおいても、「普通＝働く」という理解は変化していない。しかし、普通ではない可能性であったとしても、図14の上方への矢印が選択しうる可能性として見いだされたならば、ひきこもっていたとしてもその状態は即否定されることはないだろう。当事者だけではなく、彼らを取り巻く家族や社会においても同様の拡張がなされたならば、ひきこもりはひきこもりであったとしても、芹沢が「ひきこもりという行動が家族や周りとは折り合えなくなっていることが問題である」という意味での「問題」では最早なくなるといえる。

### 5.5 「先駆的決意性」は、なぜひきこもり問題の処方箋とならないのか

以上のことは、『存在と時間』の「先駆的決意性」がひきこもり問題の解決に無力である理由を明らかにするだろう。ひきこもりの人々が「世人」や「世間」の意味・規範に適合できないことに苦しんでいるとするならば、『存在と時間』における不安に襲われることで、一旦はそれを無意義化することはできるかもしれない。3.3で確認したような、ひきこもり当事者たちの不安についての証言は、そのことを示していた。

しかし、ひきこもり問題が「問題」でなくなるためには、意味の再構成がなされるか、図13から図14への拡張として示されたような新たな可能性が見いだされ、そのことによって図15で示されたような「緩み」が生じなければならない。そして再構成・緩みどちらにとっても、「否定」する者としての〈他者〉の存在なくしてはなされえないといえる。

「緩む」とは、当初見いだされていなかった可能性が見いだされることであった。不安は現存在が現存在自身に向けて呼びかけるために、世界の意味・規範を無意義化できたとしても、それだけでは新たな可能性は見いだされない。そして、他者と没交渉的になり単独化することとしてなされる死への先駆的決意性もまた、我々自身が可能的な存在であることをつかみ取らせるが、新たな可能性を創出することはできないといえる。たとえば、疑問を持たず「大工」として働いていた者が、不安に促されて、先駆的に決意した場合、自身の人生を見つめ直し、より自分に適した別の「仕事」や「生き方」を見いだすことはできるかもしれない。しかし、意味とはそもそも〈他者〉の「否定」を介して形成・習得されたゆえに、「単独」でなされる不安や先駆的決意性のみでは、新たに意味を再構成したり、それを緩ませたりすることはできないのである。すなわち、〈他者〉による「否定」を介さなければ、不安に陥り、先駆的に決意できたとしても、また再び適合できない「世間」や「世人」の桎梏に戻っていただけなのである。

## 終わりに

本論文ではなぜ人はひきこもるのか、またひきこもりの人々はなぜ苦しむのか、そして彼らの問題が解決されるためになぜ「他者の介入」が必要であるかということを実存論的な哲学の立場から考察してきた。

1. では、内閣府による調査や当事者の手記や支援者の考察を基に、現在日本にいるひきこもりの人々の推定数やその状態、ひきこもりの解決には「他者の介入」が必須であることを確認した。2. では、なぜ人はひきこもるのかを考察し、ひきこもる理由として言及される「世間」についての阿部謹也や鴻上尚史の分析を確認し、考察した。3. では、『存在と時間』やその前後の時期の、「世人」論を考察し、「世間」と相違していること、我々は「世間」のうちで「世人」として生きていることを明らかにした。そして4. では、ひきこもり問題の困難さが共有された意味を独力で再構成することの難しさである理由を、意味の習得・形成における〈他者〉の「否定」の役割を示すことで解明した。5. では、以上の考察を踏まえて、「空気」と「世間」、「世人」とで成立する機制が異なることを考察したうえで、ひきこもり問題の解決のためには、〈他者〉と出会い、理解が「否定」されることで、再構成・緩みが生じることが必要であることを示した。

ひきこもりの人々についての本論文の考察が示したのは、現代を生きる者は、自らの「誰」に付随する十重二十重の意味・規範によって圍繞されているということである。ひきこもりの困難さは、この意味・規範によって苦しめられていることであるが、特に「世間」の意味・規範を改変したり、そこから脱却することができないことにある。ここに、「ひきこもり」が〈他者〉の介入を必要とする理論的根拠を見出すことができる。意味・規範は〈他者〉の「否定」を介して形成・習得されたものであるために、それを再構成すること、あるいは緩ませるためにも、〈他者〉による「否定」が必要なのである。

本論文の主題は、あくまでひきこもりの人々であったが、その成果は、より広く、現代を生きる人々が感じる実存的な苦しみの理由の一端を明らかにするものであるだろう。人々が感じている「生きづらさ」の理由のひとつは、ある規範・意味で自身を縛ること、あるいは他者を縛ること／他者によって縛られることによる「息苦しさ」であると思われる。現在、世界各地で「哲学カフェ」に代表されるような〈他者〉との対話の場が広まっているが、それは「生きづらさ」を強いている意味・規範を改変するためには「独り」ではなく〈他者〉との出会いが必要であることを示唆しているだろう。

本論文では論じきれず、課題として残された問題は多い。まず、意味・規範には、「世人」(道具)のものと、「世間」のものがあるという本論文の成果は、現代のヨーロッパには「世間」が存在していないという阿部の言説を再検討する余地を開くだろう。というのは、確かに日本の「世間」と同様のものは存在しないかもしれないが、「世間」の意味・規範と同様の仕方では形成された意味・規範、たとえば、日本とは異なった「普通」の理解などが存在するといえるためである。そのうえで、「第三者の審級」が原始共同体における「抑圧身体」から、王国・帝国を成立させる「集権身体」へ、そして「抽象身体」へと転変していくとする大澤の議論を引き受けながら(大澤1990, 233, 279, 334, 363; 大澤1992, 292; 大澤2015b, 147, 256)、「世間」から「社会」への変容の契機を捉える必要がある。

さらに、論者の立場ではひきこもりの人々への実際的な調査やインタビューを行うことができず、すでになされた調査内容を基に考察を展開することしかできなかったため、本論文の考察は「机上の空論」である部分があるだろう。そのため、今後は当事者への聞き取りや本論文についての応答などを踏まえて、本論文の成果を具体化していく必要がある。また、本論文ではあくまで「ひきこもり」を主題とし、それに資する限りで「意味」や、その成立のための〈他者〉の「否定」について言及したが、それらの全容が明らかになったわけではない。メルロ＝ポンティやレヴィナスといった「他者」を主題とした現象学者や、ウイトゲンシュタインやクリプキといった言語の意味の共有を問題とした分析哲学者らの思索を参考にしつつ、主題的に論じる必要がある。さらに、本論文におけるハイデガーの「先駆的決意性」について否定的な評価は、「先駆的決意性」を〈他者〉と「共(mit)」なる仕方では再解釈することを促すものといえる。以上、本論文において論じ残したことは多いが、論者の課題として、他日を期したい。

### 凡例および参考文献

本論文で一次文献として用いたハイデガーの著作は、以下である。引用、参照する際には、[] 括弧内の略号を用い、ページ数を添えた。

Heidegger, Martin : [SZ] *Sein und Zeit*, 18. Aufl., Max. Niemeyer, 2001.

[GA20] *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs* (SS 1925), 1979.

[GA29/30] *Die Grundbegriffe der Metaphysik. Welt-Endlichkeit-Einsamkeit* (WS 1929/30), 1983.

その他本論文で使用した参考文献を以下テーマごとにあげる。なお、論文内で引用、参考文献として指示する場合、著者の姓と発表年のみをあげた。

●ひきこもり

朝倉ネオン『僕 ―ひきこもりブルース―』文芸社、2002年。

池上正樹『ドキュメント ひきこもり 「長期化」と「高齢化」の実態』宝島社新書、2010年。

磯部潮『「ひきこもり」がなおるとき 23人の臨床例』講談社+α新書、2004年。

勝山実『ひきこもりカレンダー』文春ネスコ、2001年。

―『安心ひきこもりライフ』太田出版、2011年。

上山和樹『「ひきこもり」だった僕から』講談社、2001年。

斎藤環『社会的ひきこもり』PHP新書、1998年。

―『「負けた」教の信者たち ニート・ひきこもり社会論』中公新書ラクレ、2005年。

―『思春期ポストモダン 成熟はいかにして可能か』幻冬舎新書、2007年。

―『ひきこもりはなぜ「治る」のか?』ちくま文庫、2012年。

―『オープンダイアログとは何か』医学書院、2015年。

―『ひきこもり文化論』ちくま学芸文庫、2016年 a。

―『承認をめぐる病』ちくま文庫、2016年 b。

―『オープンダイアログがひらく精神医療』日本評論社、2019年。

関水徹平『「ひきこもり」経験の社会学』左右社、2016年。

芹沢茂喜『ひきこもりでいいみたい 私と彼らの物語』生活書院、2018年。

田辺裕（取材・文）『私がひきこもった理由』ブックマン社、2000年。

ひきこもり大学出版チーム編『特別講義「ひきこもり大学」 当事者が伝える「心のトビラ」を開くヒント』潮出版社、2020年。

藤田孝典『中高年ひきこもり ―社会問題を背負わされた人たち―』扶桑社新書、2019年。

聞風坊『こもって、よし！ ひきこもる僕、自立する私』鉾脈社、2005年。

ほそつと池井多『世界のひきこもり』寿郎社、2020年。

宮西照夫『ひきこもりと大学生 和歌山大学ひきこもり回復支援プログラムの実践』学苑社、2011年。

ヤーコ・セイックラ他『オープンダイアログを实践する』日本評論社、2016年。

ヤーコ・セイックラ／トム・エーリク・アールキン『オープンダイアログ』高木俊介、岡田愛訳、日本評

論社、2016年。

●世間と空気

阿部謹也『学問と「世間」』岩波新書、2001年。

— 『「世間」とは何か』講談社現代新書、1995年。

— 『近代化と世間』朝日新書、2006年。

— 『西洋中世の愛と人格 「世間」論序説』講談社学術文庫、2019年。

鴻上尚史『「空気」と「世間」』講談社現代新書、2009年。

— 『「空気」を読んでも従わない』岩波ジュニア新書、2019年。

山本七平『「空気」の研究』文春文庫、2018年。

●言語・意味

池上嘉彦『意味の世界 現代言語学から視る』日本放送出版協会、1978年。

今井むつみ『ことばと思考』岩波新書、2010年。

— 『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書、2013年。

— 『学びとは何か — 〈探究人〉になるために』岩波新書、2016年。

今井むつみ・野島久雄『人が学ぶということ 認知学習論からの視点』北樹出版、2003年。

岩淵悦太郎・波多野完治・内藤寿七郎・切替一郎・時実利彦『ことばの誕生 うぶ声から五才まで』日本放送出版協会、1968年。

河野守夫〔編集主幹〕猪狩幸男・石川圭一・門田修平・村田純一・山根繁〔編〕『ことばと認知の仕組み』三省堂、2007年。

小林晴美・佐々木正人編『新・子どもたちの言語獲得』大修館書店、2008年。

中野研一郎『認知言語類型論原理 「主体化」と「客体化」の認知メカニズム』京都大学学術出版会、2017年。

ジャン・ピアジェ『思考の心理学 発達心理学の6研究』滝沢武久訳、みすず書房、1968年。

ジャン・ピアジェ／ベルベル・イネルテ『新しい児童心理学』波多野完治／須賀哲夫／周郷博訳、文庫クセジュ461、白水社、1969年。

スティーブン・ピンカー『言語を生みだす本能〔上〕〔下〕』椋田直子訳、NHK出版、1995年。

ノーム・チョムスキー『生成文法の企て』福井直樹・辻子美保子訳、岩波現代文庫、2011年。

ノーム・チョムスキー、ロバート・C・バーウィック『チョムスキー言語学講義』渡会圭子訳、ちくま学芸

文庫、2017年。

マイケル・トマセロ『心とことばの起源を探る』大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本田啓訳、勁草書房、2006年。

—『ヒトはなぜ協力するのか』橋彌和秀訳、勁草書房、2013年 a。

—『コミュニケーションの起源を探る』松井智子訳、勁草書房、2013年 b。

#### ●上記以外

大澤真幸『身体の比較社会学Ⅰ』勁草書房、1990年。

—『身体の比較社会学Ⅱ』勁草書房、1992年。

—『意味と他者性』勁草書房、1994年。

—『社会システムの生成』弘文堂、2015年。

木村史人『「存在の問い」の行方 ——『存在と時間』は、なぜ挫折したのか——』北樹出版、2015年。

—「歴史と物語における哲学者 ——シンポジウム「木村史人著『「存在の問い」の行方』をめぐって」への応答として——」『立正大学哲学会紀要』11号、2016年。

—「物語を語るのは誰か?」立正大学人文科学研究所『年報』第55号、2018年。

—「物語る者としての現存在」『立正大学文学部研究紀要』35号、2019年 a。

—「物語による意味の習得」『立正大学哲学会紀要』14号、2019年 b。

—「チンパンジーは退屈するのか」『立正大学文学部研究紀要』36号、2020年 a。

—「意志」『アーレント読本』法政大学出版局、2020年 b。

森一郎『ボリスへの愛 アーレントと政治哲学の可能性』風行社、2020年。

ジェームズ J. ギブソン『視覚ワールドの知覚』東山篤規・竹澤智美・村山嵩至訳、新曜社、2011年 a。

——『生態学的知覚システム』佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之訳、東京大学出版会、2011年 b。

ソール A. クリプキ『ウイトゲンシュタインのパラドックス ——規則・私的言語・他人の心』黒崎宏訳、産業図書、1983年。

マルセル・モース『贈与論』ちくま学芸文庫、2009年。

メルロ＝ポンティ『眼と精神』木田元訳、みすず書房、1966年。

Arendt, Hannah: *The Human Condition*, Chicago University Press, 1958.

—: *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, Piper Verlag GmbH, München, 1967.

Danto, Arthur C.: *Analytische Philosophie der Geschichte*, suhrkamp taschenbuch wissenschaft 328, 1980.

## 注

- (1) 令和2年7月1日の確定値では、日本の人口は、1億2583万6千人である。総務省統計局「人口推計（令和2年（2020年）7月確定値、令和2年（2020年）12月概算値）（2020年12月21日公表）」  
(<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.html>)〈2020/1/1閲覧〉
- (2) 関水によれば、1991年から2012年までの約20年間に、278冊の「ひきこもり」をタイトルに冠する書籍が刊行されており、データベース（NDL-OPAC）に登録されている最も古い書籍は、1991年10月の『青少年の無気力、引きこもり等の問題動向への基本的な対応方策——活力あふれる青少年の育成を目指して』という青少年問題審議会による答申であるという。検索時（2012年6月27日）、書籍の過半数（54.7%）が④支援者（精神科医、臨床心理士、教育者等）の立場から書かれたものであり、次いで、⑤ジャーナリストや研究者等によって書かれたものが15%、行政による出版物も15%となり、家族によって書かれた書籍は1.4%にとどまる。また、1990年代の書籍のほとんどは支援者によるものであり、総数も16冊に留まるのに対して、2000年代に入ると、10年間で206冊と十倍以上に増え、ひきこもり経験者が書いた書籍が出現してくる。支援者による書籍は前半の5年間では7割に近いものの、後半の5年間では5割未満となり、その分行政やジャーナリスト、研究者による書籍が増えているとされる。
- (3) 内閣府「特集2 長期化するひきこもりの実態」  
[https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01gaiyou/s0\\_2.html](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01gaiyou/s0_2.html)（2020/12/11閲覧）  
内閣府「生活状況に関する調査（平成30年度）」  
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h30/pdf-index.html>（2020/12/11閲覧）  
内閣府「Ⅲ 調査の結果」  
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h30/pdf/s3.pdf>（2020/12/11閲覧）
- (4) 次のア～ウのいずれかに該当する者は、ひきこもりには該当しないとして除かれている。
  - ア 自営業・自由業を含め、現在、何らかの仕事をしていると回答した者
  - イ 身体的な病気がきっかけで現在の状態になったと回答した者
  - ウ 現在の状況を専業主婦・主夫、家事手伝いと回答したか、現在の状態になったきっかけを妊娠、介護・看護、出産・育児と回答した者のうち、最近6か月間に家族以外の人とよく会話した・ときどき会話したと回答した者
- (5) ひきこもりの当事者であった上山和樹は「オタクが「快感」を原点にしているとすれば、ひきこもりの原点は、「苦痛」、さらに言えば「怒り」だと思います。「怒り」が、ひきこもりの精神生活において根

本的な中心軸になっている。「恐怖」と言ってもいいのですが、それだと、自分がこれまで受けてきた〈抑圧〉へのどうにも度しがたい強烈な感情を掬えません」(上山2001, 139)と述べている。

- (6) この「第三者の介入」は第三者が部屋に上がり込んで本人を引っ張り出すというようなことではなく、時折やってきて、ただそこにおいて、また帰っていく他者にも意味があり、あるいは実際に家まで来なくても、第三者が関わっているらしいという情報でもよいとする。さらに、ペットやルールも第三者たりえるとしている(斎藤2012, 56-7)。
- (7) 『特別講義「ひきこもり大学」』に掲載された当事者の母親たちの対談において、参加者の一人は「きっと一人でいることが心地よいという人も多いと思うんです。つまり孤独が悪いのではなく、その状態を受け止められないから生きづらくなるのです」(ひきこもり大学出版チーム2020, 138)と述べている。
- (8) ひきこもりの事例報告で頻出するのは、勤勉な父と教育熱心な母親のもとで育てられた長男で、幼いころから優秀な成績をとる優等生であるという類型である(勝山2001; 磯部2004, 22, 118-9; 田辺2000, 10)。斎藤は「手のかからない良い子」という常套句がある。ひきこもり事例の両親から話を聞いていると、しばしばこの常套句に出くわす(斎藤2016b, 78)と述べている。『世界のひきこもり』では、著者自身だけではなく、他国のひきこもりたちにおいても、教育熱心な母親の子どもがひきこもりとなっていることが報告されている(ほそとと池井多2020)。また「長男」でなくても、成績が良く学級委員であったり(田辺2000, 123, 142)、気をつかう「いい子」である場合が多いようである(田辺2000, 183, 195; ほそとと池井多2020, 45f.)。また上山も、「ひきこもりに突入していく多くの人は、幼少時、「手のかからない、親の願望を先取りして読み取ってその通りに行動してしまう」子どもだったはずです。つまり、自分の存在は、「親の願望に合致している」形でしか許されないと考えていて、それが親への巨大な憎悪感情となっている場合が多い」(上山2001, 176)としている。
- (9) 『世界のひきこもり』において、イタリアの社会心理学者であるマルコ・クレパルディは現代社会では競争、達成へのニーズ、その結果としてのプレッシャーが増大しており、ひきこもりとは、「それらの変化への「揺り戻し」や「副作用」」(ほそとと池井多2020, 146)であるのではないか、という仮説を立てている。また当事者の勝山は「心の中にはすごく恐怖感がありました。「社会に取り残された」というのは、「ブチエリート」としては絶望的じゃないですか。…良い大学へ行って、良い会社に就職するつもりでしたからね。それが親の欲求でしたし、自分でも戻ろうという焦りがありました」(田辺2000, 16)と、さらに「病院へ行くまでは、偏差値教育という一種の宗教に入っていて、マインドコントロールされていたみたいです」(田辺2000, 21)と述べている。また勝山は別所では、「もう誰からも強制されない自分になろう。それ以外に本当の意味で人生を生きることなんて、ボクにはできない」(勝山2001, 17)、あるいはひきこもりの就労について「自分でなんとかしなければ……、世間の圧力に負けたひきこもりは

勇気をふり絞ってアルバイトを始めます。でもひきこもりですからすぐ辞めるに決まっています」(勝山2011, 18)と述べている。

- (10) 斎藤は韓国やヨーロッパにおけるひきこもり事情を紹介している(斎藤2005, 51-96; 斎藤2016a, 120ff., 301f)。
- (11) 斎藤は、柄谷行人の議論を参照しつつ、世間体の倫理観の「ごくシンプルで、おそろしく抽象的なルール」とは「あなたとあなたの家族の言動は、隣人があなたに対して抱く期待からあまり逸脱してはならない。ただし隣人の期待なるものは、あなたが隣人に対して抱く期待にほぼ等しいものとする」(斎藤2016a, 94)とする。
- (12) 『特別講義「ひきこもり大学」』には、当事者の母親の対談が掲載されているが、そこでも「世間」や「世間体」を気にすることが議論されており、ひきこもり当事者の家族にとっても「世間」が重要な意味を有していることがわかる(ひきこもり大学出版チーム2020, 133-7)。
- (13) マイケル・ジージンガーは世論調査の結果として、「バスや地下鉄で乗り合わせた見知らぬ人たちを、信用できますか」と問うと、アメリカ人の50%以上がイエスと答えるのに対して、同様の質問にほとんどの日本人は信用できないと答えるという調査を紹介しているが(河合・内田22)、このことは日本人にとって「世間」の中にいない人々は警戒の対象であることを示しているといえるだろう。
- (14) ひきこもり当事者である聞は、「知識を得ることで、ありのままの自分の存在を表現する適切な共通の言葉に出会い、それが、自分の取まるカテゴリーを発見した感じがしてとても心が安らいだ」(聞2005, 101)と述べ、漠としているために対処の仕方や伝え方、知識のえ方がわからなかったことが、名称が与えられ明確となることで、「自分の中に、自分のこととして、ちゃんと取り込まれていく」(聞2005, 102)とする。また、ぼそっと池井多はひきこもりの人々の言葉は、正論ではなく、「重く不器用で冗々しいことが多い」ものであり、「あえて「面倒くさいこと」の領域に分け入り、本当に自分が感じたり考えたりしていることを忠実に置き換えようとして、苦悶の果てに絞り出している言葉」として「真論」と呼んでいる(ぼそっと池井多2020, 21)。
- (15) 上山のこのような記述は、『形而上学の根本諸概念』における退屈の記述と相似している。論者は以前に木村2020 aにおいて、退屈について主題的に論じたことがある。
- (16) 『形而上学とは何か』(1929年)においては、不安によって開示される無は、ただ存在者全体を否定するのではなく、否定することによって、存在者を存在者としてこれまでは覆蔵されていた訝しき(Befremdlichkeit)、すなわち無に対する端的な他のものとして開示、強調するような「不安の無の明るい夜」(GA9, 114)と呼ばれ、そのような「無の内に投げ込まれて保たれていること」(GA9, 115)が「現-存在」であるとされる。

(17) ただし、「存在の歴史の解体」というプロジェクトの必要性は、独力で意味の再構成の困難を、ハイデガー自身も自覚していたこととして、すなわち、ハイデガーは歴史上の哲学者という〈他者〉と対話することによって、意味の再構成を行おうとしていた、と解釈できる可能性はあるだろう。しかし、この点をさらに考究することは、本論文では行うことができなかった。

(18) 論者は、ダントの物語文について、アーレントの『人間の条件／活動的生』における物語論についての問いに応答するという形で、マッキンタイアの物語論を絡めながら論じたことがある（木村2018a, Arendt1958, Arendt1967）。

(19) ダントは、どのようなカテゴリーが変化の理由として想定されるかは、「物語Sの観点で出来事EはSの部分成すが、出来事E'はそうではないという際に我々が引き合いに出す」（Danto 1980, 28）ような「物語の規準」としての「一般法則」によってあらかじめ規定されているとする。さらにダントは、同じひとつの出来事も、それが位置を占めるそのつどの物語に応じて異なった意味をもつと主張する。すなわち、「それと関連付けられるそのつど異なった後の一連の出来事と調和することによって、異なった意味をもつだろう」（Danto 1980, 27）と述べ、ある出来事の意味は、後に起こったどのような出来事と結びつけられるかによって可変的であるとする。

このような「過去は未完結であり、いかなる歴史叙述も改訂を免れない」ことを、野家啓一は「歴史の全体論（ホーリズム）」と呼んでいる（野家2005, 158）。

(20) 「求心化－遠心化作用」は大澤の鍵概念の一つであり、様々な箇所而言及されている。本文で言及しなかったテキストにおいて、主題的に言及されている一部分の箇所を以下に挙げる。大澤1992, 35, 505; 大澤2015, 20.

また、「間身体的連鎖」について言及されている箇所としては、以下を挙げておく。大澤1992, 38; 大澤2015, 178.

(21) 本文で挙げた箇所以外で、「第三者の審級」および「先行的投射」について主題的に言及している箇所を一部分であるが挙げておく。大澤1992, 38, 292; 大澤2015a, 178.

(22) 論者はアーレントの「意志」論を考察し、彼女が「意志」を反射的・自動的な行動を留保し「可能性を開く」能力として捉えていたことを示したことがある（木村2020b）。また、〈他者〉による「否定」は、叱責などのネガティブな出来事に限定されない。他者が自分が理解しているのとは異なった仕方でも語や道具を使用したりすることも、「意味」の捉え直しの契機となるために、「否定」であるといえる。また、意味は、一度形成されたからといって、その後変化しないものではなく、常に変容と修正に晒されている。

(23) この例からは、空気を読む際には、その理解が間違っている可能性があることを示している。臨在感的把握／求心化－遠心化作用の対象となった〈教師〉の咳払いには二つだけの自己紹介の「否定」として

解釈されたが、本当は、ただ喉がむず痒かっただけかもしれない。すなわち、規範が明示されない「空気を読む」という状況において、〈他者〉の意向は忖度されるしかないのである。

また、この例では、同じように舌打ちしたとしても〈参加者〉よりも〈教師〉のほうがより強い「否定」となるだろう。それは、〈参加者〉よりも強く〈教師〉に対して複数の者が臨在感的把握／求心化－遠心化作用を行うことによって、「第三者の審級」が成立し、それによって〈教師〉が権威づけられているためといえる。

- (24) この自己紹介の例は、あくまで単純化されており、実際のケースでは、「3個」という明確な数字にまで絞りこむことは稀であるだろう。また、上述の例では、「1個の自己紹介」「6個以上の自己紹介」をしなければいけないと教師が考えているという可能性は排除されていない。通常は、あまりに短すぎたり長すぎたりする場合に、教師が促したり注意したりすることによって、「短すぎず長すぎない」という空気が醸成されることが多いだろう。
- (25) 論者はいくつかの箇所ではハイデガーの1931/32年講義『真理の本質について』の図（GA34, 313, 321）を参照し、「存在への志向－開蔵性」と現在のなものとの可能的なものへの関わりとの区別を論じたことがある（木村2015、木村2019a）。本論文における物語文の構造の図（図4、5、6、11、14）と、意味の訂正の図（図7、9、12、15）の関係は、後者が前者を包摂するという関係にあり、このことから『真理の本質について』の図を捉え直せば、物語文の図は、それを可能にするさらに上位の意味への志向（「存在への志向－開蔵性」）を条件としており、その意味の変容は図の内部ではなされず、〈他者〉の「否定」を介さなければならないといえる。
- (26) 「優等生」とは、「良い成績を取る」あるいは「良い大学・会社に入る」という目的を実現するという構造を有している点で「世人」と同様の構造を有する。しかし、「優等生であるべき」という規範は、恣意的であるため、「世間」と同様の構造を有するといえる。
- (27) 『世界のひきこもり』のなかで紹介されているフランスのひきこもり女性のテルリエヌは、「大人」たちによって動かされている外的世界への恐怖を語りながらも、「自分も「ふつうの人」の暮らしができたらいのに、とも思っているのです。だって、「ふつうの人」の暮らしの中には良いものがたくさんあるから」（ほそと池井多2020, 74）、あるいは「一方では、私は「ふつうの人」の暮らしも望んでいるのです。結婚もしたい、新しい家族も作りたい、新しい家も持ちたい、専門だった勉強も復活させて、新しい仕事も始めたい……」（ほそと池井多2020, 83）と述べている。
- (28) ただし、勝山は自助団体について批判的である（勝山2001, 92f）。
- (29) 関水がインタビューした、ひきこもっている当初は自身のことを「ひきこもり」とであると解釈できなかった者が、様々な記事を読むことによって次第に自身を「ひきこもり」とであると解釈できるようにな

っていく過程は、テキストを介しても〈他者〉による「否定」が行われることを示しているだろう（関水2016, 72以下）。

（2021年1月20日受理、2021年1月22日採択）